31

梅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
３１

【Ｎコード】
Ｎ４３５０Ｖ

【作者名】
梅

【あらすじ】
玄関のドアを開けたらそこは、湖でした。
異世界に突然流された３１歳の中年。どうその世界と関わっていくのか。はたまたのんびり生きていくのか。
処女作です。多々問題があると思います。気にしないで頂けると幸いです。

第1話　ドアを開けたら。（前書き）

処女作です。よろしくお願いします。

第1話　ドアを開けたら。

外は夕焼け。
遠くでヒグラシが鳴いている。俺はこの時間帯がとても好きだ。
なんというか夏の終わりというか物悲しさが。

明日は晴れるかな。

そんなありきたりの、なんでもない事を考えながらノロノロ家までの道を歩いていた。

高校を卒業し１３年。なんの変哲もない人生を歩んできた。
今年でもう３２歳になる。世間でいう中年、というやつだ。
不思議なもので２０歳ぐらいのときには、３０歳はものすごい遠くて、ものすごい大人なものだと思っていた。
でも。
実際なってみると全く大人じゃあない。
全く変わってない。まぁよくよく考えると同じ人間なのだから、年齢ごときで変わるわけがないのだ。結婚とかしていれば別だが。

そうこうしているうちに自分の城が、もとい１ＬＫのボロアパートが見えてきた。
今晩のオカズはサバ缶だな～と考えながらガチャガチャドアを開く。
ドアを開くと、申し訳程度の玄関、無理矢理付けたようなキッチンがある。

・・・

あるはずなのだ。

そこには見慣れた玄関もキッチンも、まして母が今どき北海道の旅行で買ってきたクマが魚くわえている置物も。
なにもなかった。

何も。

そこには・・・そう。大きな海、いや湖があった。
海だと勘違いしてしまうほどの。遠くには山らしきものの陰影。

間違えた。
とっさに思った。入ってきたドアから後ずさるように出ようとしたが、できなかった。

塞がっている。一面に木の表面のような模様。
よくよく見ると大きなマングローブのような木に、ドアがくっついていた。
まさにとって付けたように。キィキィ動くのはご愛敬。

しばらく木、いや大樹に身を寄せ呆然といていた。
ものすごい驚きだが、この素晴らしい景色のせいなのか少々したら落ち着いてきた。

事実は小説より奇なり。

ほんと今の状況に合う言葉。

さてその状況だが。

幸い湖の上では無く湖畔だった。
ここはどうやら地球のようだ。というかなんとなくだが。
とういうことは、時空的な？歪み的な？ものでどこかに飛ばされた。
または異世界。パラレル的な？
（夢かどうかは古典的な方法で確認済）

まぁ地球上のどこかに飛ばされた、とういのが妥当？だろう。

そして周りの状況。

湖を囲うように森が広がっている。

もう夕焼けから日が落ち、少し不気味だ。

というかどこか違う場所なのに、時間帯は同じぐらい、そして季節も同じような環境だ。
家の近くではありえない。田舎だがこんな場所は知らない。

やはりパラレル的な？
でも今考えても無駄だ。明日の朝調べよう。

今晩を凌ぐことが問題。
なにしろ今現在持っているものは、
1、サイフ（５０００円前後、カード類）
2、リュック（某登山ブランド）
3、筆記用具（仕事用）
4、タバコ2箱、ライター
5、携帯
6、飴、ガム、お茶

7、時計

そして服装はTシャツとジーパン。

・・・・

どう考えてもアウトドアには向かない装備だ。季節が同じでよかった。ヘタするともっと酷い状況の可能性もあった。

ほんと良かった。

・・・・がんばれ俺。ポジティブにいかんと泣きそうになる。

とりあえず大樹にくっ付いたままのドアをひっぺがす。
以外と簡単に取れた。
それを大樹に立て掛けその隙間で寝ることにした。
鉄製なので重いはずが、それほどでもなかった。
きっとナチュラルハイなのだろう。

そして僕は現実逃避するようにかなり早いが寝ることにした。
起きたら元に戻っていることを願いながら。

第2話　月空。

＞i３４９３５―４４０４＜
夜。
寝始めて４時間ほど経過しただろうか。

遠くで声がする。
最初夢なのかと思ったが脳が少しづつ覚醒し改めて声だと感じた。

ただ声、というより歌、だった。
透き通るような女性の声。
こんな湖畔で、雲ひとつない月空。
とても。とても神秘的な印象だった。

チャンスだと思った。
人がいる。それはたまらなく嬉しかった。
ここがどこだかわからないが、英語は片言だがしゃべれるし、きっとなんとかなるだろう。
無事帰れる。という思いがこみ上げたが、この神秘的な歌を邪魔するのはどうかとも思えた。
ゆっくり物音を立てないようドアと大樹の間から身体を出した。

空気は少しひんやりしていて。遠くで木々の擦れる音。
俺は大樹に少し隠れて様子を覗った。

その女性は湖にいた。
いや・・・正確には湖面の上にいた。
最初は沐浴かとも思ったが随分奥にいるのに。
足が見える。

月明りのせいで顔や姿ははっきり見えないが。明らかに浮いて、いや立っている。

・・・・・・

「まじで？」

思わず声を出してしまった。ここに来て一度も声もあげなかったのに。

だって非現実的過ぎた。

俺の思考回路は軽くショートした。

そしてばれた。

顔こそ見えないがガン見されている。

このままではただの不審者。思いきって声をかけた。

「あの、すみません！怪しいものじゃないんです！」

実際怪しいのはどっちだかわからない。

だって浮いているんだもの。幽霊かもしれないのに。見たことないけど。

そして少し間があって。

「・・・誰？」

なにより驚いたのは言葉が通じたことだ。日本語で答えられた。以外と家から近い場所なのかもしれない。

やっと帰れる。まぁここにいたのは数時間だが。

「ここはどこなんですか？俺、いや自分は〇〇市からいきなり来てしまった・・・というかなんというか。そう！道に迷ってしまって。帰り方を教えて頂けると幸いなのですが！」

俺の話を聞き、またやや間があってからその女性は近づいてきた。
歩いて。
もしかしたら、浅いだけなのか？だとしたら浅すぎる。浮いてるようにしか見えない。
不審がられないよう軽い笑みを絶やさない。
社会人としてのスキル。

そして湖畔から5メートルほどで止まった。
歳は１６歳ぐらい。意思の強そうな瞳、黒いいやブルーがかった長い髪。
華奢で身長は１５０～１６０ほど。ロングスカートなワンピース。
なんというか物凄い美人登場。幽霊と言われたほうがしっくりくる。
だってあまりに現実離れした容姿なんだもの。

「その見慣れない服装・・・アナタ・・・流れてきたの？」

俺の姿を舐めるように眺めてそう言った。
ナガレ？駅とかでギター引くようにみえるのか？・・・いや違うな？

「ナガレ？いや気付いたらここにいたんです。ここは何市ですか？もしや他県？明日仕事なので始発に乗って帰りたいんです、最寄の駅を教えて頂けますか？」

・・・・いま俺、残念な動物を見る目で見られました・・・・

第3話　精霊のおかげ。

彼女は残念な目で俺を見て、それから周りを目で追った。
いきなりだ。何も無いのに。頭がおかしくなったのか？

「・・・どうやらアナタの言ってることは本当のようね。精霊がざわついていたのはそのせいだったのね。」
「・・・はい？」
精霊と言ったなこの子・・・ヤベェのに捕まった。

「アナタは流れてきたの。アナタの元いた世界からね。」

異世界決定。

彼女が言うには、この世界はトルツベルグ。俺の居た世界とは違う世界。
どうやら俺のような流れてくる人は年数人いるらしい。
そんな人達を（流人）というらしい。流刑人のようだ。
この世界には精霊や魔法があり、剣があるらしい。
リアルドラ〇エ。
指先から火を出してもらうことで不承不承納得。
他にも聞いたが徐々に話していくとして。

「色々ありがとう。正直混乱しているが助かったよ。俺の名前は藤川　吉乃。ヨシノと呼んでくれ。君の名は？」

「私？私はシュリよ。長い名前があるんだけど面倒だからシュリでお願い。この近くに住んでるエルフよ。」
そういえば耳なげぇ・・・

とりあえずウチくる？といってシュリは普通の地面を歩きだした。
精霊に害がないと聞いたらしい。随分信用してくれている。
ありがとう精霊さぁん！

とその前に。俺は大樹に掛けられたドアを持つ。もう俺とお前しかいないからな・・・
妙な親近感を抱いているのだ。
しかしこの少し錆びているビビットレッドのドア、ホント軽い。鉄じゃなく中身は発砲スチロールか？

さくさく歩くシュリにボチボチ付いて行きながら、色々聞いた。

まず。この世界トルツベルグ。４つの国で成されている。
・夾国（キョウコク）主に人の国。貴族や王がいる国。
・マイロン国。主に亜人と言われる、獣人や竜人等の国。
・メイエール国。主にエルフやドワーフの国。
・モンテ国。色々な種族が住んでいる国。

夾国にのみ貴族・王と言ったが、他の国にも王や貴族は存在する。
夾国特色ないんだもの。まぁリアルドラ〇エの国。

モンスターやはりいるようだ。しかもたくさん。良かった食われなくて・・・
この場所はマイロン国とメルエール国の間でモンスターも少ないらしい。

そしていよいよ流人ついて聞いてみた。
流人はこの世界では比較的優遇されているらしい。
なぜかって？

こちらに流れる際、特殊な能力が身に着くらしい。能力は様々で発動も様々。
性別を変えられる能力や自分の身体を水に変えたり、思考を読んだり。
ものすごい。でもそんな人ばかりじゃ、国が傾くだろう？と質問したら、発動条件がわかりにくかったり難しいものが多いのだという。発現できない人も中にはいるとか。

そんなこんなしていたら、家、というか大樹というか・・・なシュリ家が見えてきた。
樹のウネリの間にあるような家だ。どうやったら建てられるのか教えてほしい。

「さあどうぞ？あぁでもその、トビラ？みたいな板は外でお願い。」
「わかった」
俺はドアを近くにあった岩に立て掛けた。

ドンッ！

なんで？そんな重くないのに。
シュリもさっきまで軽々持っていた俺を見ていたので、
驚いてそのドアを持ち上げようとした。

「・・・持てない・・・もしかして重いもの持てる能力とか？」
「ええ！そんな微妙な・・・でもリュックとかの重さは普通だぞ？」
よくわからない。実際シュリの家にあった鉄棒や椅子はしっかり重かった。
鉄限定でもなく重量系でもなく。
とりあえず放置。

そして室内。中々広い。リビング＋俺の部屋×5ぐらいか。
木の香りがする室内。電気は無いが所々ロウソクが付いている。やはり文明自体は遅れているのだろうか？まぁ魔法の世界にテレビあったら引くしな。
シュリは奥から3番目のドアを開き、ここを使ってと言われた。
やはり中もログハウスでロウソクだ。
ドア開けたらロウソク付くって・・・なんてメルヘェン。

それからシュリは、明日またゆっくり話しましょうと言ってドアを閉めた。

俺も中々に疲れていたらしく、ベットにごろんとしたら即寝だった。

第４話　朝とコーヒー。

朝。
のそのそと起き出し、たばこに火を付け・・・ようとしたところで思いだす。
そうか、もうあのボロアパートじゃないんだな。
３年前に買ったコーヒーメーカーも１年前購入した液晶テレビも今はない。
仕事は、いやまぁもう仕方ないことだし諦めよう。

ふと、良い香りが。
これはコーヒーを淹れるときの芳しい香り。
部屋をゆっくりと出る。昨日は気付かなかったが、リビングには大きな木製テーブル。その先には使い勝手の良さそうなキッチン。
外からは木漏れ日と蝉の鳴き声。車などの喧騒は聞こえない。
ここは住みやすそうだ。
キッチンにはシュリ。
・・・・１６歳ぐらいにしか見えないがなんといか。エプロン効果だろうか。
言い難い色香が、ある。
嫁だったら抱きしめて頬ずりするところだ。

「おはよう」
「おはよう。もうすぐできるから適当に座って」

ありがとうと言いながら近くの椅子に座る。
そして昨日おことを反芻し、質問を吟味しながら朝ごはんができるのを待った。
やがて運ばれてきた料理はベーコンエッグとトースト、コーヒー。

ジャムらしきものはラズベリーのような色をしている。

「色々、ほんとありがとう。頂きます。」

「頂きます」

二人ともに合掌する。こちらにも同じ風習があるのか。こちらの世界は場所が違うだけで風習や言葉など共通するものが多い。これは流人のせい、いやおかげなのだろうと納得する。

昨日まで不安でいっぱいだったがシュリに出会って本当よかった。疑うことから始めるような人間関係が多くなってきた昨今。精霊さんのおかげだが初めから信用されるのは嬉しいものだ。

しかし逆に、俺はシュリのことを信用しきれていない。まぁ騙すメリットがないとは思うけれど。

食事が終わり、コーヒーを嗜みながら話を切り出す。

「なんでこんなに良くしてくれるんだ？」

ややあって

「・・・困っている人を見逃せない。精霊達も助けろウルサイし。なにより心細い気持ちは・・・わかるから。」

わかるから。そうか確かにここにはシュリ以外住んでなさそうだ。心細いのか。

「そんな若いのに1人暮らしなの？親御さんは？」

「両親はもういない。前の戦争で亡くなったの。・・・私そんな若くないわよ？」

「そうかそれは余計なことを聞いた。すまなかった。１６歳ぐらいじゃないのか？」

「４０ぐらいかな？」

ほうほう・・・年上ですか・・・

「見えん！ダウト！」
「？ダウト？ほんとよ。数えてないからよくわからないけど。エルフは一定の成長すると見た目はゆっくり老いていくのよ。私は少し止まるのが早かっただけ。」

エルフの寿命は長いらしい。素晴らしい。
シュリはここで１人で１０年ほど住んでるそうだ。その前はメイエール国にいたが夾国との戦争により逃げてきたそうだ。
今は和平が結ばれているそうだが。夾国は野心が強く領土を増やすことに躍起になっているようだ。
若干気まずい空気になりそうなので話を変える。

「話変わるが。俺は帰れるのか？」
「帰れない、と思う。聞いたことがない。」
そうか。と言ってコーヒーを一口。

可能性は感じていたが・・・両親には悪いが仕方ない。俺も３１歳だ。寂しいとは言ってられない。なにより情けないところをシュリ見られたくなかった。
・・・あとで部屋で泣こう。枕を濡らそう。

「・・・しばらくはここにいれば？部屋は余っているし。色々教えてあげるわ」
同情なんかいらない！なんて言わない。藁にもなんとやら、だ。

「お世話になります・・・」

第5話　勉強。

そして2週間。

ここの生活にも随分慣れてきた。
まずシュリに教わったのは魔法と精霊魔法。
これらには適正さえあれば使えるようだ。せめて生活で使うぐらいはできるようになりたい。
というか使ってみたい。指から火出したい。ライターいらず。最高。

魔法はイメージ。精霊魔法は精霊が感じられないと無理だそうだ。
魔法はやってみたら以外と簡単にできた。妄想の現代人だからか？
適正というのは魔法量まぁＭＰが多いか少ないからしい。
俺のＭＰは普通人ぐらいある模様。
シュリの４分の１程度らしい。・・・鼻で笑われた。
普通最高じゃない！程々が１番なのさ！
なんでも、流人にはものすごい魔法量のあるやつなどもいるらしい。
なにかと制約があるらしいが。
流人の「制約」とはまぁ言うなれば、力を行使するための制限があるということ。
例えれば国ごと滅ぼす能力を使用するためには、１ヶ月飯抜き。みたいな。
大きい力ほど制約はきつくなる。シュリが言うには神様がパワーバランスを考えているから。らしい。

毎日使えば少しづつ多くなるそうなので頑張った。
呪文はあるそうなのだが、イメージ作るためのものなので大きい魔法以外では使わない。
言葉とイメージが合えばオリジナルでもよいそうだ・・・かっこい

いの考えよう。

精霊のことはいる、気はするが結局できなかった。残念。ものすごい気に入られているらしいが。よくわからん。

この世界は治安は悪くモンスターもいるので、身を守らないとと考え、木刀ぐらいの棒を毎日振って訓練した。体力は現代人、しかも３１歳。微妙だった。最初筋肉痛で動けなくなった。こんなの初めてスノーボード行ったとき以来だ。情けない。

今はぼちぼちだ。少しはましになったか？ぐらい。

シュリとも仲良くなった。

でもたまに寝ぼけて下着姿でリビングに出てくるのはやめてほしい。ギリギリだ。精神も鍛えれた気分だ。

最近は俺が食事係だ。なにもしないより良い。

ただこれが一番きつかった。なにしろほぼ完全自給自足。麦やベーコン等の加工品は近くにある村から買うのだが。買うためにはお金が必要。

どうするか。

それは薬草とったり狩りをするのだ。それを金に変える。それ以上に狩った獲物が基本食だ。

俺は予想以上にへたれだった。いや狩り自体は魔法や木刀で簡単だったが。

生き物を殺生することに慣れていなかった。

もうゲーゲー吐いた。鹿の内臓を取り出すときも気を失いそうになった。

その点シュリはすごい。無表情でズバンといく。

きっと魔法より尊敬した。

でもまぁ毎日やればそれなりに慣れる。
慣れたくなないが、スーパーで売ってるものを何も知らず買っていたあのころより随分ましな自分になったと思う。

なぜ俺が食事係になったかというと、実は他に理由がある。
三食ともベーコンエッグとは。
シュリは料理があまりできない。
あんなに肉捌くのすごいのに。
二日目に作ったクリームシチューが好評で、食べ終わったあとビシッと指差されて
「食事係決定！」
即決かい。

調味料は様々にあるのはありがたかった。基本料理をしない（できない？）シュリでも色々持っていた。まだ村には連れて行ってもらってないが醤油や七味的なものもあるようだ。
流人の恩恵がここにも！という感じだ。さすがに科学調味料はない。

シュリは毎日一番奥の部屋に籠り、
薬草を採ってきて薬にしている。
薬のほうが高く売れ、喜ばれるそうだ。
薬草関係の知識も教わってはいるが、〜が何グラムとかもう老化の始ってる脳にはきつい。

そして夜は勉強。この世界の教養や時勢、常識を教えてもらっている。
飽きやすい俺は半分ぐらいづつ聞いている。
すぐ「ヨシノ聞いてる？」といって良くしなる杖で叩かれる。
スパルタだ。冷静で感情があまりでない顔なのに、口より手が先って・・・

逆らわないようにしよう。
しかし思うのはシュリは頭が良い。しかもかなり教養がある。貴族というものは見たことないが、そんな感じ。
豪邸でドレス着てそう。
きっと戦争前にはかなり裕福な家だったのだろう。
さしずめここは別荘か。

ここ2週間で知識や生活能力は手に入れたが、今だ流人の特殊能力なるものは良くわからない。
やたら重い（らしい）ドアを軽々持てるしか・・・
それ以外は普通に重いし・・・
もしかしてこれだけなのか？
日本製ドアを軽々持てる能力。制約はしょぼいので無し的な。
えーーーーー
残念すぎるよそれは・・・唯一良かったことは寝室までドアを（ドア氏と言おう。仲間だし）入れる許可が下りたことぐらいか。

そして今日も夜は更けていく。
明日のことは誰もわからない。
でもきっとここに俺がここにいる理由もシュリと出会うことも。
必然だったと。そう、思う。

第6話　シュリ。

まだ朝靄の中。

少し肌寒い時間。

ドンドン・・・

やや強いドアを叩く音で起こされた。

「んん・・・」

「ヨシノ・・・起きて・・・」

ガチャっとドアを開けシュリが入ってくる。

そしてやや緊張を帯びた声色でシュリが話しかける。

「・・・どした？」

少し諭すように言うと、シュリはすっと近づいてきて片膝をつく。

シュリはこんなに朝早く、いや夜が明けたぐらいの時間なのに、プレートメイルを着ていて、美しい髪を後ろで1つに束ね、槍を持っていた。

完全に戦闘準備だ。狩りでもプレートメイルは着ることはない。かなりの状況と考えられる。

「詳しい話はする時間はないわ。囲まれてる。目的は私。ヨシノは隙を見て逃げて。」

冷静すぎるような早口にたたまれ、俺は言葉がでない。

たのしかったわ。

と耳元で囁くと、シュリはスッと立ち上がり廊下へ出ていった。

「え？」

と声を出した瞬間。

玄関のほうからまるで雷のような、轟音。

これは魔法だ！

寝ぼけていた頭も一気に覚醒しベットから飛び起き廊下のほうへ転がるように走る。

そしてドアから覗き見ると、すでに半壊したリビングと玄関だったものが。その外には１００人はいるように見える。前に何人か倒れているが。

そして。

その中心にはシュリの姿があった。

遠巻きにはなっているが囲まれているようだ。何がどうなっているのか、さっぱりだがこれだけはわかる。

シュリを狙った「敵」だ。

絶体絶命か？とも思ったがシュリの周りには風の層が出来ていて、次々とその風達が人を薙ぎ払っていく。風の精霊魔法なのか？

さしずめ無敵戦艦だ。

常人の４倍はあるという魔法力にも納得だ。

兵らしき男達果敢に剣や魔法で攻めてはいるが、まるで紙のように

吹っ飛ばされていく。
人がゴミのようだ。

しかし、当初１００人ぐらいといったがもっといるのかもしれない。

「そのうち魔法力も無くなる！ひるむな！！」

仕切りに鼓舞する指揮官らしき男。
確かに心なしか風が弱くなった気もする。

ここで俺は顔を部屋に戻し、体育座り。横にあったドア氏を抱えて。
きっと。シュリ１人であったなら逃げるのも容易だったに違いない。
あれだけすごい精霊魔法が使えるのだ。でもそれをしなかった。
なぜか。

俺がここにいるからだ。

俺の力は常人レベル、いやもっと低い。なにしろ最近まで剣すら握ったこともなく、獣の解体で嘔吐してしまうようなヘタレ。
シュリは囮になること、俺を生かすことを選んだのだ。自分と引き換えに。
こんなヘタレのために。
じゃあシュリを守れるのか？戦えるのか？人を殺す覚悟はあるのか？
さすがに狩りには慣れたが、人は無理だ。
どちらが悪か正義かもわからないが、恩のあるシュリを助けたいとは思う。
でも無理だ。ガタガタ震えが止まらない。俺は普通の現代人だと痛感し涙が零れる。

「ううぅ・・・仕方ない・・仕方ないんだ・・・俺がここにいても

邪魔しかできない・・」

そう。邪魔でしかない。この世界にきたのは、何を成すためでもなくただ、シュリを殺すために来たようなものだ。

なら。

一刻も早くこの場を離れ、シュリの彼女を重荷から解放しなければ・・・

ズルズルと震えの止まらない身体を引きずり、ドアの反対側にある窓を目指す。

仕方ない、仕方ないんだと自分で自分に言い訳を言いながら。

そっと窓の外を覗うと、シュリのおかげでまだこちらには人がいない。

1階なので問題無く外に出られそうだ。

シュリごめんほんとごめんマジでごめん！

ガチャ

窓を開け、足を掛ける。服はパジャマで素足で、持ち物はドア氏のみ。時間はない。シュリの行為を無駄にはできない！

そして足に力を入れ、飛び出そうとした。

そのときだった。

ずっと続くと思われた轟音が止んだのは。

少しの静寂。

少しの間。

そして歓声。

「とうとう捕えたぞ！シュリ！シュリ・ガーディアル・メイエール！！！」

その名は妙に俺の心を冷静にさせた。

シュリの名は俺を納得させた。

シュリがここに居た理由も。１人でいる理由も。

あまり笑わない理由も。

夜の勉強のとき、夾国のことメイエールのこと話しづらそうにしていたのはこのためか。

まだ。

まだ、シュリの戦争は終わってなかったんだな。

そしてもうすでに諦めていたのだな。
自分の運命を。

カチン。と。
何かが外れる音をこの老化したクソみたいな脳で聞いた。

第7話　変貌。（前書き）

シュリサイドです。

第7話　変貌。

ドコーーーーンッッ！！

指揮官らしき男に捕まり、生臭い息をかけられながら少しだけ良い気分だった。

シュリはもうすでにこの戦いを始める前から諦めていた。
いやここに隠れ住む時点で諦めていたのかもしれない。
女王だった母が私を急ぎの用件があるからと言ってマイロン国近くの町に赴けと令を出した次の日。母は暗殺された。
きっと母はわかっていたのだ。こうなることを。周りの人々がおかしくなってきたことを。
夾国との戦争はただの皮切りに過ぎず、その混乱に乗じて配下の誰かがメイエール国を乗っ取る算段がなされていたことを。
そして私は行方不明扱いになり、新たな王が起った。その王は従兄弟にあたる男で醜い男だった。脳も醜かったからきっと背後には夾国がいるのだろう。
最初私は亡命も考えたがとても出られる状態ではなく諦め、ここ王族の避暑地に隠れ住んだ。

悔しくも思い打倒も考えた。でも1人でなにができるのか。すぐに諦め、いつ見つかるかとビクビクしながら毎日を過ごした。
近くの村に行く時も魔法や服装で変装し、人と接しないよう心がけた。

いつも1人でいた。生きているが死んでいる。そんな気分で１０年間過ごしてきた。

でも、２週間前、流人であるヨシノと出会った。

ガッチリした身体なのに、妙に理屈好き。なのに途中で面倒になり適当になる男。
理知的で冷静を装ってはいるが、いつも顔に出る。食事を褒めたときなんて全く隠せていないのに。生物を殺すことに異常と思えるほど臆病で、これからこの世界を生きていけるか最初、不安だった。
最後の頃は随分ましになったけれど。きっと前の世界では殺生とは無縁の所だったに違いない。少し羨ましい。

毎日楽しかった。そしてヨシノは優しかった。あと少し、一緒にいれたなら私の心は癒えたかもしれない。国のこと自分のこと笑顔で話せたかもしれない。
でもそれもおしまい。ただの夢だった。
神様がきっと最後に出会わせてくれた人。最後のプレゼント。
なぜ今見つかったのかとかもう、どうでもいい。

たった2週間だったけれど、時間は関係ないんだと実感する。
無事逃げてくれると良いなぁと考えていた。
矢先。

ものすごい爆音がヨシノの部屋のほうから轟き土煙が上がる。

周りを囲んでいた兵達からどよめきが聞こえる。
「な、なんだ？」
「おい誰だあんなとこ魔法撃ったのは？」

「ヨ、ヨシノ・・・」
まさか誰かに見つかって攻撃を受けたのか？
自分のことより気になり、膝が震える。
最後の望みすら奪うの神様？
誰か、誰かヨシノを助けて・・・
そしてやっとわかった。この気持ちの正体を。
私は・・・私は。
ぽろぽろと涙が溢れ、止まらない。前がよく見えない。ヨシノの無事を確認したいのに。

うなだれ膝を付く。
「おい。どうした。立て！」
後ろ髪を引かれ立たされようとしたとき。

ヒュンヒュン・・・

幾重もの光の槍のようなものが土煙の中から空に飛び出し、上から兵達に向かって降り注がれる。
光の雨のような攻撃に次々兵達は倒れていく。

それは物凄い光景だった。誰も逃げられない。
光の雨が当たった個所からは血もでない。焼かれしまって血すら蒸発しているのか。
土煙から飛び出し続ける光の雨は、土煙が晴れる数分続き、ほとんどの兵隊を飲み込んでいく。
私にはなぜか当たらなかったが。

そして私は見たのだ。
逃げたはずの、神様のプレゼントである男、ヨシノの変貌を。
真っ赤な髪。左手に3メートルはある真っ赤な大砲を構えた、いや、左手が大砲になっているヨシノを。

「ヨ、ヨシノ？」思わず疑問になる。だってヨシノは黒髪だ。
なによりあのヨシノが人を、殺したのだ。しかも大量に。動揺も、混乱もせず。
印象全てが変わってしまっていて。

「おう？シュリすまん。お前を見捨てられなかった。」
ものすごい良い笑顔。やはりヨシノだ。
しかしこれは本当にヨシノがやったのか？
あの臆病で魔法力も常人レベルなはずのヨシノに本当にできるものなのか？
しかも1人や2人じゃない。５００人はいた兵隊達を数分で壊滅したのだ。尋常じゃない。
国家レベルの術者でもこうはいかない。
そして尋常じゃないのは、ヨシノを囲む精霊達の数。炎のように踊っている。みんなテンションが上がってる。色とりどりで虹のようだ。
まるで天災の時のようなはしゃぎっぷりだ。
まさかこれがヨシノの特殊能力なの？

「お、おい！貴様・・・何者だ！」

呆気にとられていた指揮官が叫ぶ。私の後ろに居たためかまだ彼に

は光の雨は当たっていなかったのだろう。
曲りなりにも指揮官は頑張った。と思う。恐怖と混乱で常人なら逃げていただろう。
さすがは一個中隊を纏めているだけのことはある。と私は感心する。
ヨシノはしばし考え、左手を上に掲げながらこう言った。
「んん～しいていうなら・・・主夫？」
と同時に左手の大砲から飛び出る光。
そして叫ぶ暇もなく倒れる指揮官とまだギリギリやる気のあった残りの兵。
神様がくれたモノは果たしてなんなのか？
今は良くわからないけれど。
自分が必要としているモノだったことは確かなようだった。

第8話　対話。

さっきまでの騒音が嘘のように。
朝の静けさに包まれた家の周り。

「ヨシノ・・・・一体なにがあったの？いつものあなたらしくないわ・・・こんなに殺して・・・おかしくなっちゃったの？」

『殺す』という行為に人一倍畏怖していたヨシノ。本人は現代人だからと結論づけていたけれど、その反応は臆病すぎるほどだった。それが、５００人近い人を躊躇無く光の槍で射抜いたのだ。シュリは能力の発動でおかしくなったのでは？と考えた。

「んん？いや？殺してないよ？」

「ええ！？」

と言って周りの兵士を見渡す。確かに出血していない。・・・そう言われれば確かに金属等は破壊されていない。服部分が破れているぐらいだ。

「雷の精霊魔法で意識だけ刈り取ったんだよ。少し強すぎたかもだけどね。流石に人は殺せない。・・・っとこのままじゃあヤバイか。」

そういって左手の肘部分まで変化している大砲を地面に向ける。すると先端部分が筒状から木の枝のようにみるみる変化していき突き刺さる。

「木の精霊よ。ちょっとあいつら動けないよう蔦で縛ってくれ！」
すると兵士達の周りから蔦が生え身体を縛っていく。少し蛇が人間を襲っているようで気持ち悪い。

「これで大丈夫かな？」
ふ～と息をつくヨシノ。

「・・・土の精霊の眷族である、木の精霊のことなんてまだ教えてないわよ？というかそもそも精霊魔法自体教えてないわ・・・どういうことなの？」

「・・・まぁ落ち着いたら話すよ。それよりこの人間達、どこかの兵士のようだけどなんでここにいるんだ？メイエール国だろう？」

少しはぐらかすようにヨシノが話を変える。
シュリとしてはもっと問い詰めたい所だが、この状況を話さないといけないことも事実なのでそれに同意した。

「この兵士達はこのメイエールの兵よ。・・・ただの人間じゃあないわ。ハーフエルフなの。この国はエルフの国というのはもう話したわよね？でも全てがそうじゃあない。多少なりともいろんな種族がいる。９：１の割合かな？その中でも彼らは難しい存在なの。」

「難しい存在？・・・まさか・・・差別を受けてる、とかか？」
「正解。人にもエルフからもね。耳が人間のようでしょ？だから大半は人間の中でひっそり暮らす者が多いわ。でも、この国で生まれたハーフエルフはどうにもならない。隠れて生むなら別だけど。目立ちすぎる。そして迫害を受けるの。それを悲しんだ先女王が兵士に登用することを決めたの。仕事にもつけない者が多かったから・・

・。」

どの世界にも差別や迫害、そして助ける人々はいるのだなぁとしみじみ思うヨシノ。

「そうなのか・・・よし。そこの指揮官的なやつに話しを聞いてみるか。」

今度は左手をその兵士に向ける。先端は先ほどの筒状より2倍ほど径が大きくなっている。

「水の精霊よ。さっぱりさせてやって」

バケツをひっくり返したほどの水が兵士に帯びせられる。兵士は「ひゃうっう！」と叫びながら意識を取り戻した。

「こ、ここは？・・・・は！そ、そうだ私は光に撃たれて・・・」

取り乱し始める男はよく見ると中肉中背の身体つきで、ちょび髭だ。偉そうだが鎧は素人目線で見てもあまり良いものではない、と感じる。髪はバーコード。中小企業の部長のようだ。リストラ済の。

「ちょっと落ち着けよ。おっさん。ここに来た目的を話してもらおうか。」

若干強気に聞くヨシノ。挙動不審だった彼も、ビクビクしながらも答える。

「そこにいるシュリ王女を捕縛するためだ！我らを見捨て1人逃げた女狐をな！・・・この10年・・・どれほど悲しみ、恨んだか！

貴様らにはわかるまい！領主様から私に令を頂いたときはどれほど嬉しかったか！」

５０歳は過ぎた部長（部長と命名）が泣きながら訴える。そこには狂気すら感じる。そして殺せと叫ぶ。動けない身体を揺らしながら。

「・・・やはりそういう噂になっていたのね。」

「噂？」

「そう。たまに近くの村に行っていた時聞いたの。王女は戦争が怖くて自分が可愛くて逃げた。って。本当はお母様の命令でこっちの町の視察に来てただけなんだけどね。」

「・・・・お母さんは？」

「私が城を出た後、暗殺されたわ。」

さらりと答えるシュリ。ヨシノは言葉に詰まり、「そうか・・・」とだけ答える。

「ヨシノはもう気付いたの？私の立場とか。妙に冷静にしているけど」

「ん？あぁ。フルネームと話聞いていればなんとなく、な。それよりおっさん！どうなんだ？シュリの話を聞いてみて。」

しばらく呆然と二人の話を聞いていた部長は話しかけられ我に帰る。

「いや！嘘だ！王女は金品を強奪、止める女王を殺し隣国に亡命しようとした。というのが現王の発表だ！」

そのお互いの話を聞き、ヨシノは熟考していた。状況と今後の展開を。どうすることが一番良いのか。そして一番したいのか。

そうこうしているとピーーーーピーーーーと機械音。左手の大砲から聞こえる。

「んん？！」

驚いて見ると大砲の、いやちょうど左手の手首あたりにバイクのデジタルメーター風のものが付いており、そこから鳴っている。そしてそこから光が溢れだしヨシノは光に包まれた。

「え？！」っとシュリが発するのと同時に光は収まる。ヨシノの姿は元に戻っていた。左手にはドア氏。寝起きのような黒い髪。モンゴル民族風のパジャマ（ここは変わってない）

しばしの沈黙。嘘だ！と喚いていた部長も呆気にとられマジマジとヨシノを見ている。

「・・・んまぁ戻ったわけだけれども。シュリは母親を殺してなんかないよ！」

「ってさっきのなかったように話すの！？」

「え？さっきって？」

「記憶喪失！」

「あ～わかったわかった～あとではなすから～」

「なんでカタコト！？めんどくさい空気全開！」

冷静なシュリも流石に驚き問いただす。

「わ、私も説明を求む！」

便乗する部長。

「わかった！話すから！落ち着いてくれ！」

掴みかからんばかりのシュリを両手で押さえ、話し始めた。

第9話　回想。

それはシュリの名前を聞いた時だった。

轟音の後の静寂。部長の声は良く聞こえた。

「とうとう捕えたぞ！シュリ！シュリ・ガーディアル・メイエール！！！」

今までシュリに教わってきた国々の情勢の中で一番詳しかった国。
メイエール国。
先女王の素晴らしい統治と現王の残念な統治。それを話すシュリは妙に心が籠っていて少し意外だったことを覚えている。
名前を聞いた時、大体のことはわかった。だってメイエールと名に入っていたのは女王だったから。そして状況。一人隠れ住む王族。
追手らしき兵士。
追われていることは知っていたのだ。逃げられたはずだった。でも逃げなかった。
なぜか？

俺がいたから。
俺と言う荷物を持ってしまったから。
悔しかった。無力な自分がとてもとても悲しかった。

込み上げる思いとともに、頭のどこかで「カチリ」とまるで、鍵を回すような音が鳴った。
気がした。

その瞬間だった。ドア氏が光り出し、持っていた左手にアメーバの

ように纏わり付いたのは。そして突然周りには沢山の小人達。
その中で一人（いや一匹か？）に話しかけられた。

『ようこそトルツベルグへ流人さん。やっと話せるようになりましたね。私はメルツ。どうやらアナタは能力を発動しないと話せないようですね。』

そのメルツと名乗った子は、他の小人のように単色では無く、人のような肌、ピンクの花のような服だった。

「お、お前らは一体？」

『私達は精霊ですよ。流人さん。それよりも急がないとシュリちゃんが大変なことになっちゃいます！アナタの能力ならこの状況もきっと問題ないです。お願いします。助けてあげて！』

「しかし助けるといっても・・・使い方がわからない・・・」

すでにドア氏と一体化した左腕をさすりながら言う。ごつごつした表面。手首辺りにはバイクのデジタルメーター風のモノが・・・先端は・・・宇宙戦艦ヤ●トじゃないか！
ええ！っと驚いていると、

『それはアナタのイメージを具現化したものですよ。私初めて見ますよそんな形・・・使い方は・・・面倒なので私が直接教えます。』

えいっとヨシノの頭に飛び、すぅっと中に入っていった。

「えへぇ！」ガバっと頭を抱えるヨシノ。すぐ声が聞こえてくる。
『大丈夫ですよ。』

その瞬間。

全ての構造が脳に流れてくる。まるで忘れていた何かを思い出すように。

「なるほど。理解した。」

唐突にそう言い、左腕を上に掲げながら、

「雷の精霊よ。頼む。死なない程度、意識刈り取るレベルでよろしく！」

そして掲げた左腕のヤ●ト型大砲から光。

ドゴーーーーンッ

吹き飛ぶ屋根。

掃除をしてなかったのか、物凄い土煙。

・・・・・・・・・・・・

「やべえ！部屋の中だった！シュリに怒られる！ひぃぃぃぃぃ！」

『いや、ちょっと！冷静に！』

メルツに言われても半狂乱なヨシノ。

『って聞いてない！？・・・おい！このヘタレ！』

「ひゃい！・・・あ、そ、そうだな・・・冷静冷静にならんと。というか少し地がでたぞ？メルツさん。」

『あ、いやそんなことないですわ！ささ！第2波を打ってください！』

「おうぃえ！よろしく撃ちまくってくれ雷の精霊よ！」

「という感じですはい。」
なぜか申し訳なさそうに答えるヨシノ。屋根や壁を壊したことをシュリに怒られるとビクビクしているのだ。

「なるほどね。やっぱり能力なのね。・・・ところで制約は？そのレベルの特殊能力だとかなりの制約なんじゃないの？」

制約。世界の均衡を保つため神が作ったといわれる、能力発動の条件。

「・・・・・今は言えない。」
「・・・なぜ？」
「だって・・・部長も聞いてるから。」

シュリと二人で、がばっと部長を見ると、ビクっと身体を震わす部長。

「・・・そうね。それは後でいいわ。・・・頭に入ってきたメルツ

って・・・まさかあのメルツなの？」

そうシュリが言うと、ヨシノの頭からニュルっと、ところてん出すようにでてくるメルツ。

『そうよ～久しぶりですね。シュリちゃん。大きくなったわね。』

ヨシノと部長は唖然としている。頭から出てきたのもそうだが、普通の状態でも視覚できることに。ちなみに部長は精霊魔法は使えない。だから初精霊なのだ。

「あ、え、シュリはこの精霊を知っているのか？」

「えぇ。彼女はメルツ。始まりの精霊の一人で、女王にいわゆる神託を伝える精なの。始まりの精霊というのは、４人いて、それぞれの国にいるの。まぁ神に一番近い存在ね。」

『神託というか私からのアドバイス的な？』

「メルツは世界中を見て回り状況や問題をみてきてるから。」

どうだと言わんばかりに、説明するシュリの横で自慢げなメルツ。

「というか・・・なぜ能力解除したのに見えるんだ？他のは見えなくなったのに・・・」

『それはね流人さん。アナタと私は契約したのよ。アナタの頭の中でね。契約すれば私は世界に存在を許される。つまりは具現化できるのよ。ありがと。』

「・・・クーリングオフしたいんですが？」

『却下。』

「次に会うのは法廷だな！」

『まぁいいじゃない。私は便利よ？』

「便利？」

『何よりこの世界のことなら大体のことは知ってる。そしてこの美貌！アナタの能力は私がいることで増幅するし、食費かからない！』

「ほほう。」

『そしてこの美貌！』

「二回言った！」

『重要なので。まぁ結構重宝するわよ？・・・魔力くれれば、人ぐらいにもなれるし。夜も安心よ？』

シュリから黒いオーラが放たれ始める。・・・夜の話はあとで聞こう。

そして話を変えるヨシノ。ギリギリな状況な空気を読んだようだ。

「と、いうか、だ。話が逸れたな。本題に入ろう。」

ヨシノは話を少しきり、シュリの正面に移動しドア氏を足に立て掛け、出来るだけ真面目な顔でまた、話し始める。

「シュリはどうしたい？」

第１０話　歩き出す。

もう気がつくと、太陽が出始め朝靄は消えている。
まだ夏のようで、すでに暑くすら感じる。

「シュリはどうしたい？」

忙しなかった空気の中、切るように言葉をヨシノは発した。

「え？」

いきなりの襲撃。ヨシノの能力。メルツの登場。様々なことが一度に起こった後、いきなりの切り替えにシュリは思考が追いつかない。

「あっと。ごめん。シュリ。話が飛んで。いや、飛び過ぎでもない、か。」

顔を近づけ、部長に聞こえないぐらいの声で話し始める。

「シュリ、君はどうしたい？この国メイエールを取り戻して良くしたい？それとも全てを忘れて他国に行きたいかい？」

「・・・・・そういうこと」

驚きから一変、真剣な表情になるシュリ。

１０年。この問題はずっと考えてきたことだった。しかし実際は考えるまでもなく隠れ住むことしか選択肢がなかった。でも考えない日はなかった。

たまに村で聞く、圧政。人々の嘆き。そして私に対しての怒り。
逃げていた。考えているふりをして逃げていた。私一人じゃあ無理だと逃げていた。
またいつも通り、どうせと逃げ始める思考に言葉が落ちる。

「俺は、シュリが決めた道を全力で助けるよ。」

シュリは言葉も出なかった。
普通ならば、つい最近出会った人間にこんなこと言われても下心としかとれない。
しかし、この男は、逃がそうとしたシュリを助けようとした心がある。下心ではない「心」をすでに見せていた。

そしてシュリ自身も。

わずかな時間でも、二人には確かな信頼が生まれていた。
それだけにヨシノの言葉は重く、シュリの逃げる心を押しつぶす。
「なにいってんの？」などと言って逃げられる状況では無くなった。
唇をぐっと引き締め、すっと肩の力を抜く。

・・・私の本音、か。・・・

「私は、この国を、救いたい。」

二人の間に、すうっと風が吹いた。覚めるような冷風。清流に冷やされたような風。
言葉は発せられることで、現実に変わる。

ヨシノはゆっくりと笑顔になる。そして小さく「わかった」と囁く。
シュリはドキドキしていた。それはヨシノの笑顔のせいなのか、これから起こる物語を考えてのことなのか。
シュリ自身、薄々はわかってはいたが今は気がつかないふりをする。今、必要なのはその感情ではないから。

「でも、どうやって？」

ヨシノの能力は確かにすごい。しかし国相手にしたら蟻とゾウほどに違う。

「大丈夫。見てて。」

ヨシノは短く言うと、シュリの横にふわふわ浮いているメルツに、「お願いできるか？」と問う。二人は契約のためか思考が読める。一種のテレパシー、思考電話。

「りょーかい。少し魔力貰うわよ？」

メルツはヨシノの額に手を当て、しばし目を瞑る。
メルツってツインテールで結構可愛い顔してるんだなぁとしみじみ考えるヨシノ。これでニーハイでミニで・・・と悶々と想像し始める。

『流人さん。いやヨシノさん。想像してること。私にダダ漏れですよ？』

ニヤリと人の悪そうな笑顔で話すメルツ。シュリちゃんに話すわよ？とからかう事も忘れない。

変な汗を背中にかきながら、すみません。と懇願する。

『よし、とりあえず、豚のように這いつくばって私を喜ばせて？』

ひぃっと言いながら後ずさるヨシノ。

『あはは。嘘ですよ。嘘。・・・では始めますか？ヨシノさん？』

「ぶ、豚のように這いつくばれ、と？」

『いやだから嘘ですって。ヨシノさんがわたー

「なりますとも！あぁ豚のように！むしろならせてください！豚のように！」

『ほんと黙れやクソ野郎。奥歯ガタガタいわすぞカス。』

二人の様子を見ていたシュリ、部長もどん引きだ。ヨシノにいたってはビビりまくり。

（あぁなるほど準備が出来たということかな？）

頭でメルツに対して言葉を思うと、メルツは若干拗ねたようにコクリと頷く。便利だな。この思考電話。念話とでも呼ぼうか。

そしてヨシノは元の冷静な顔に戻り、部長が転がっている所まで歩き出す。

そう。歩き出した。運命なのか、なんの意思かはわからないけれど。

今、歩き出したのだ。

第１１話　部長。

部長の這いつくばっている所までいくとヨシノは膝を付く。
そして横に落ちていた、部長のものであろう短剣を拾う。装飾が成されていてあまり実践向きには見えない。恐らく自害用かお守りか、そんなところだろう。

「な、なにをする気だ！・・・・・・い、いや私のことはいい！部下を！みんなを助けてくれ！」

この言葉に少々驚くヨシノやシュリ。普通、いやこのような私腹を肥やしたような、バーコードデブから、命乞いこそあれ、仲間を、部下を救うことを願うとは微塵も思わなかったのである。

「ここにいる奴らは私にずっと、ずっと付いてきてくれたのだ！こんな辺境に飛ばされ、ゴミのように扱われながらもずっとだ！家族を無くした私にとってこいつらは家族も同然！頼む！助けてやってくれぇぇ！！」

悲痛な、それでいて真剣な声にヨシノは、今まで考えていた方法を変えることにした。

ヨシノはゆっくり立ちあがり部長の背後に回る。そして部長を縛っていた蔦をブチブチと切り始める。
呆気にとられる部長。シュリは動向を見守っている。しかし最悪を想定し、いつでも動けるよう気を張る。

やがて全て解け、自由になる部長。

「な、なぜだ!?なにをする気なのだ・・・」
突然の解放。疑いの目を向ける。ヨシノは切り終わり部長の前に再び膝を付く。
「アナタの名前は?」
「・・・ジョセフだ。ジョセフ・アルベルトだ・・・」
「ではジョセフさん。話を聞いてもらえませんか?けしてアナタや部下さん達には危害を加えません。誓います。ですからお願いです。聞いて頂けますか?」
コクリと頷くジョセフ。妙に落ち着いていて、心に響くヨシノの声に思わず、という感じで。
そしてヨシノはもうほぼ破壊されたリビングの、奇跡のように残っているテーブルに目をやり、
「ではあそこで話しましょう。立てますか?」
「わ、わかった。」
よろよろではあるがジョセフは立ちあがり、テーブルの横に転がっている椅子を戻すと、ゆっくりと座る。それをヨシノは見届けると、シュリも来るように目で促しながら歩き出す。ちなみにメルツはずっと黙ってシュリの肩に乗っている。
ジョセフを同じように椅子を戻すと、二人はジョセフと反対側に座る。目の前にはヨシノだ。ヨシノは持っていた短剣をテーブルにゴトンと置くと腕を組んで話し始める。
「早速ですが、私はここでいう流人のヨシノと申します。流れてきたのは2週間前です。なので非常に簡単にしかこの世界のことを知らないのです。」

「な、なるほど。あの異常な力はやはり・・・しかしたった2週間ということは、そこのシュリ王女とも付き合いはそれほどでもない、ということだな？・・・ですね？なぜ助けるのです？はっきり言えば、ヨシノさんには関係のない話です！」

若干、敬語を使うか迷った風ではあったが、ヨシノの丁寧な対応に自身も従うことにしたジョセフ。

「いや、ジョセフさん。すでに関係しているんです。シュリには命を救われた恩がある。そしてなにより・・・」

「な、なにより？」

「アナタ方が騙されていることが悲しかったのです。」

目を見開き驚くジョセフ。何を言っているんだこいつは？狂っているのか？と内心思う。

「私達は何も騙されていませー

「それではあの、女王殺害の件ですが、なぜ食い違っているのですか？いや、１００歩譲ってシュリが嘘を付いているとしましょう。ではなぜ殺害後、逃げる必要があったのですか？メリットが無い。まして、自分の母を殺す機会なんて星の数ほどあったはずです。なぜ、あの状況で？なぜあの逃げるのが困難な場所で？しかも逃亡の計略も練られてない。」

言葉を失うジョセフ。ヨシノの声はスッと不思議なくらいジョセフの心に入り込んでくる。

確かにおかしい。でも現王の１０年前の発表では母親を殺害後、国

外逃亡を図るが関所を通れず、国内に潜伏中。
実の母、しかもこの国の最大の権力をもつ女王を殺しておきながら、この無計画さはなんなのだろう。
しかも野心からなら、なおのこと、おかしい。
夾国に攻められ、過酷な状況にあったあの時、女王を失うのは大きな問題だった。他の2国が出兵してくれなければ今頃、ここは夾国になっていた。
国が無くなれば野心も何もない。夾国に加担したなら、そちらに逃げるはずだが、ここは真逆に位置する。
思わず、ということはまず、ない。王女と女王が中が良いことは自他ともに知る事実。

困惑と焦りから動揺が隠せないジョセフ。信じていたことは、一体なんだったのか？

「そして現王は、どんな政治を行っているのですか？」
「え？」

「現王は賢王なのですか？」

現王の政治は、酷いものだった。税は倍になり、夾国にはほぼ言いなり。まるで属国だ。そして私達、ハーフエルフの生活は奴隷と一緒のようになり下がった。私達も首都警備から辺境に回され、ゴミ扱いだ。
だから私、いや私達は恨んだ。女王を殺したシュリ王女を。
でも。なぜ考えなかった。少し考えればわかったように思う。この流人に言われるまでもなく。
きっと私達は生きることに必死で。王女を殺すという希望だけを胸に生きてきた。

そう。それだけが生きる目的になり、盲目にさせていたのだろう。

「まさか・・・私達は騙されて・・・？」

「えぇ。そのまさか、ですね。しかも気になるのはここの立地です。確かに見つかりにくい場所ですが、村からそこまで離れていない。シュリはこの国のトップ殺しの容疑者。なら見つかってもおかしくない場所だ。いや見つからないのがおかしい。」

「確かに・・・国中で探していたのだ・・・ありえませんな・・・」

これにはシュリも驚く。確かにその通りだ。いくら魔法で姿を変えたとしても、森から何者かが出入りしているのだ。噂にならないはずがない。

沈黙が流れる。しばしの時間の後、ヨシノはその空気を破る。

「生かされていた、のでは？現王はすでに知っていたが、あえて生かしていた。利用価値があると踏んで。」

「ま、まさか・・・」

「そ、そんな・・・」

「・・・ジョセフさん。近日中に何かありませんか？夾国絡みで。」

「あ、あるな・・・1ヶ月後、夾国の王が来訪する・・・」

「・・・手土産か。」

少し言葉を切り、ヨシノは続ける。

「シュリの容姿は抜群で、他のエルフを見たことはないが、ここまで整った容姿はいないだろうと思います。夾国の王に欲しいとせがまれたのか。それとも何かあるのか。わからないが碌な事ではないです。
恐らく、シュリがここから逃げないよう定期的に見張っていたのでしょう。そこに現王からの捕縛命令。
しかし捕まえようにも相当な精霊使い。てこずるのは必須。
そこで辺境に回されたハーフエルフの隊。被害があっても問題ない。失敗しても問題ないよう森を正規軍に囲わせればまず大丈夫。
ぐらいのことを考えていたに違いないですね。」

ヨシノの推測だが、信憑性のある言葉に二人は息を呑む。ジョセフはここを正規軍が囲んでいるのを知っていたため、驚きを隠せない。

「そこでです。ジョセフさん。提案があります。」
「・・・なんだ。」
もうすでに丁寧さは抜け、悲しそうな目つきでヨシノを見るジョセフ。

「これから私達はこの国を変えます。手伝ってくれませんか？」
「・・・ぬう」

頭を下げるヨシノ。
確実に有利で、自分をも簡単に殺せる力を持つヨシノに頭を下げられることで無碍に断れない。
全てを信じたわけではない。
だが、ヨシノには妙な説得力があるし、納得もできる。
国を変える。
この言葉は本当であれば、非常にありがたいことだ。

苦しんでいる国民を知っているからだ。
何より、部下が苦しむ姿はもう、見たくはない。

「・・・・わかった。同じ騙されるなら、お前に騙されてやろう。」

第１２話　変身。

そこからは以外と簡単に事は運んだ。

ジョセフさんに正規軍に助けを乞いに行ってもらい、木の陰に隠れていて、その空いた穴から俺とシュリは抜けだした。

正規軍自体相当緩い印象だった。

きっとジョセフさん達になんでも押しつけ甘い思いをしてきたのだろう。

ジョセフさんには念話という意思疎通魔法で、遠く離れてても話せるようにシュリにしてもらった。

脳味噌に電話が入ってような気分だ。

きっとなんらかの処罰があるとジョセフさんはわかっているのに、笑顔で走って行った。

最初、俺は脅してでも協力させるつもりだった。

でもジョセフさんの人柄は物凄いよかった。

取引先だった某中小企業の部長に容姿が似ているからって、色眼鏡で見て申し訳なかった。

なので共闘、協力を申し込んだ。正解だったと思う。

なによりも良くやってくれたのは、メルツだが。

「でも、良く信じてくれたわよね？私も物凄く納得してしまったけど。」

シュリの風の精霊魔法で低空飛行をしてもらっているときだった。

シュリは好んで風の精霊魔法を使う。他の精霊魔法も使うが風の精霊のほうが気が合うらしい。

初めて飛行したが、

・・・いや正確にはシュリに抱えられているわけだが。
風が気持ち良い。
背中は違う意味で気持ち良い。
「あれはー・・・実はメルツのおかげなんだよ。」
「え？じゃあ魔法で？洗脳系の魔法？」
『不正解ですよ。シュリちゃん。ただ私はヨシノさんの（声）を心に響かせただけですの。』
しょっこりシュリに胸辺りから顔を出すメルツ。羨ましい・・・
「でも、そんなんじゃあ、あんなに納得してくれないんじゃない？」
「あぁ、んじゃ俺から説明するけど、きっとジョセフさん達は実は、気付いていたんだと思う。気付いていたけど、考えないようにしていたんだよ。」
「・・・なんでそんなことを？」
確かにシュリからすれば気分の悪い話ではある。言葉を選ばなければ・・・
「あの人達は迫害を受けてきた。
女王が亡くなって悪化した。
毎日が苦しい。
でもどうしようもない。
そこに恨める存在。

すべてシュリが悪いと思えば少しは気持ちが楽だったんじゃないかな？じゃなければ怒りのぶつけどころがないから、ね。」

「・・・だから疑惑があっても蓋をしたと？」

「だと、思う。だから心に声を響かせただけで納得したんじゃない？いくら俺が正論言っても、蓋されてたら聞こえないからな。だからメルツのお手柄。」

『でも、ヨシノさんの話し方はすごかったですわ。』

褒められて嬉しいのか、俺の頭に乗って頭をさする。

「褒めてもなにもでんぞ？」

『ヘタレのビビりのくせに中々やりますわ。』

「ひどい！」

『じゃあビビーナ・ヘターレ？』

「あだ名に昇格！」

しばらく飛んで、もう森は姿形も見えないところで飛行を止める。

少し昼を過ぎたぐらいか、太陽の位置が地球と同じなら。

降り立った所は岩肌の見える丘だった。見晴らしが良く、形がはっきりわかる程度の所に町？が見える。

ふうっと息をつくシュリ。結構な距離を飛んできたのだ。正確には俺とドア氏を抱えて。凄い疲れた風だ。申し訳ない気持ちでいっぱいになる。

聞けば、ドア氏の重さは感じなかったようだ。どうやら俺が持てば重さが軽くなるようだ。

それでも俺を抱えたのだ。相当だろう。

・・・・・

あとでマッサージ的なことしてあげよう。

「着いたわ。あそこがグエンよ。私の家と首都の間にある、町。」

そう。

俺達は逃げたわけではないのだ。

というかマイロン国方面に逃げると思われるだろうから、逆をついたのだ。

ここで簡単に地理を説明すると、

メイエール国は六角形のような形をしている。

で。俺達が住んでいたのは左端側。さらに左にはマイロン国。

真ん中に首都で、六角形だけに６人の領主がおり、それぞれ三角形のような領地となっている。

なのでまだ同じ領地に居る。名前はエンデバー領。

他の領地はまた後日。

この領地は比較的穏やかで、森が多い。特産物は木材と果物。

そして今回、入るグエン。実はここにエンデバー領主が住んでいる。

完全に灯台もと暗し狙い。・・・もちろん別に思惑はあるが。

「とりあえず、姿を変えるわ。・・・・どんな姿がいい？」

思わず身構えてしまった。１６、７歳ぐらいにしか見えないが、相当な美人さんにそんなこと言われたら、す、すごい格好をお願いす

るしかないじゃあないか！

『・・・と考えていますわ』

耳打ちする幼女。いやメルツ。

血の気が引く俺。

・・・・・・・・

そして沈黙。心なしかシュリの顔が赤い。ど、どんなことを伝えたんだ・・・

「・・・・変身」

唐突に変身するシュリ。

しゅわわわ～と光ながら変わる様は某魔法少女を思い出す。

き、期待してもいいんですか？

いいんですよね？

第１３話　制約。

そして変身終了。
俺の希望も終了。
簡潔に言うと、男に変身。
しかも中々の美男子。少し男しては長い金髪。着てる服はそのままだが、プレートメイルに槍だ。別段おかしくない。むしろ似合っている。若干男にしては華奢な気もするが。なにより、髭が。髭が生えている。顎鬚が。

きっとね。バレないだろうけど。俺の心がね？泣いているんだよ。
そりゃ中身はシュリだよ？でもさ？寂しいじゃない？

「ほら！行くわ・・・行くぞ！呆けてるんじゃない！」

うなだれた俺を急かしながら歩くシュリ。いやシュリ男。

スタスタ歩いていく。俺も焦りながら付いていく。

丘を下り、町の外壁に辿り着く。特産だけに全て木でできている。
頑丈そうだ。しかも高い。門以外から入るのは至難の業だろう。
門番の検問を待つ列に並ぶ。前には５人。バレはしないだろうがドキドキする。
やがて順番がきて門番に話しかけられる。
門番は兵士というよりは老人に近い。定年後の仕事か？

「お疲れさん。通行料は１人３０エールだ。」

そしてお金をスッとだすシュリ。

エールとはお金の単位だ。シュリの売っていた薬が1つでだいたい100エール。
庶民の一般平均月収が1500エール。まぁ30エールは安いほうだ、と思う。

「はい確かに。一応聞くが、ここにはなんの目的で来たんだ？」

軽い感じで聞いてくる門番。良さげな性格なようだ。雰囲気に滲み出ている。

「はい。ここには仕事を探しにきました。」

用意されていたような返答を返すシュリ。声は変わって無いから、出来るだけ低く出している。うまい。

「とすると、冒険者かい？ギルドは門を抜けて直ぐ右にあるよ。がんばれよ。」

ギルドとは簡単に言うと、人材派遣会社。困ったことや、人手が足りない時、依頼すると冒険者と呼ばれるギルド登録者が受け、仕事をこなす。料金は報酬の2割をギルドが取る感じらしい。
様々な仕事があり、ドラゴンの討伐から草むしりまである。ランクがあるらしく、受けられる仕事が変わってくる。大体でしかわからないのは、教えてくれたシュリ自身、あまり知らないからららしい。
王女だものな。仕方ない。

お礼を言いながら門を抜ける俺達。
門は馬車も通れるほどの大きさで。俺は昔見た日光市にある陽明門を思い出す。
あそこまで素敵な彫刻はされてはいないが、大きさはあれぐらいだ。

そして先には町が広がる。門から真っすぐ、メイン通りらしきものがあり、店が並んでいる。いや町というか、都市だ。デカイ建物こそないが、建物の数がものすごい。メイン通りの先には大きな屋敷が見える。きっと領主が住んでいるのだろう。その建物だけ白い石造作りだ。東京ドーム４分の１、というところか。

だが。想像していたより人が少ない。木造の建屋には果物や野菜やらが売っているのが見えるが、活気が無い。
初めて見るドワーフは小さいおっさんのイメージ。
買い物している猫耳付き少女は亜人と呼ばれる種族だろうか？いよいよファンタジーな気分になる。あと、シュリ以外で初のエルフも結構いる。耳がツンと長い以外は人間そのものだ。気になるのは人間らしき人とハーフエルフが見当たらない。どちらも耳が普通だから見分けはすぐつくはずなのに。
違う地区なのかな？

良く見ると、閉めている店もちらほらある。まるで廃れた商店街だ。他に大型スーパーでもできたのか？ってぐらいだ。

「なにをボサっとしてるの？早くいきましょう？」

「あ、悪い。色々考えてた。」

まずは宿屋探しだ。そして昼食。人間お腹が空いてると碌な事を考えないからな。
メイン通りに入り、しばらく進むとやがて宿屋街が右手の方に広がっていた。
看板には色々書かれてはいるが少ししか読めない。
そう。実はこの世界の字は日本語ではない。言葉は通じるのに、文

字が違う。文法は同じで文字が違う。という感じだ。読み方も一緒なのに。
聞けば流人は基本この世界では珍しい黒髪ばかりらしい。
つまり日本や中国、アジア圏内の人間しか来ていないことになる。
この世界は何かおかしい。
日本人の妄想が作った世界のようだ。

サービス等の内容がわからないのでシュリに宿を決めてもらう。
結局部屋にシャワーが付いている宿に決めた。といっても水道というものはないから魔法で水を吸い上げて出すらしいが。
金額は1人85エール。
なにはともあれ2人部屋である。
一定の距離を保っていた男女もきっとより一層仲良くなれる。はず。

「お部屋はこちらです。」

人の良さそうな兄さんに連れられ2階に上がる。木造でしっかりした作りだ。1階には食堂もあるらしい。
部屋に案内され荷物を置く。
シュリはベットに腰掛けながら、男のまま・・・

「ヨシノ。じゃあ色々話してもらうわよ?」
「いや、男のまま女言葉はやめてくれ。」
「解くとまたかけるようだから我慢して。早速だけど、ヨシノの制約はなんなの?」

「いきなりそこか・・・まぁいいけど。ここなら人にも聞かれないしな。・・・俺の制約は2つあるんだ。」
「2つ?・・・珍しい。普通なら1つなのに。まぁあれだけ強力なら仕方ないわよね。」

「1つ目は時間制限。外にあるドア氏が変化したときメーターが付いていたろ？それがタイマー。」

ドア氏は宿主に嫌がられた。確かに部屋に入れたら床が抜けるかもしれないしな。
まぁ盗まれる心配もないとは思う。ここでは珍しいが、重いから誰も持っていこうとは思わないだろう。

「なるほどね。だからあの時いきなり解けたのね。時間は？」

「1日で31分。」

皮肉にも年齢と一緒。デジタルメーターに始め31：00とあってドンドン減っていったから、脳内でメルツに聞いたのだ。

「ふふ。関係あるかわからないけど、まぁ歳をとってよかった、ということね？」
「あまり笑えんが。」

「そしてもう1つは？」

「それがまだ・・・教わってないんだ。」

とそこまで話した時、シュリの服に隠れていたメルツがサッと飛び出る。
人に見つかると大変なことになる。見える精霊なんて中々いないのだ。

『ふう。やっと人気がないとこに来れましたのね～。』

「お、丁度良いところに。もう1つ教えてくれよ。」
『・・・聞きたいのですか？』
シュリと俺は当たり前と言わんばかりに頷く。
沈黙のあと、もったいつけてメルツは言った。
『言いづらいのですが、「能力で人を殺せない」です。』

第１４話　守るよ。（前書き）

少々短いです。

第１４話　守るよ。

人を殺せない。そう確かにメルツは言った。
しかし、あの状況では人間、正確にはハーフエルフだが。殺しはしなかったものの、
そう選んだのは（ヨシノ）自身だ。

「いや、でも・・・ほんとに？」

『えぇ。正確には人型動物、又はそれに近い魂を持つ動物です。つまりあの時ヨシノさんはご自身で殺さないを選択されましたが、それは僥倖だった、ということですわ。』

「もし、殺すを選択していたら？」

『能力の発動、自体しなかったと思います。正確にヨシノさんの能力は（大気中の精霊の力を無制限に使用できる）なので、精霊の力を取り込めずに終わります。』

あの時、発動しなかったら。と考えるとヨシノとシュリはゾっとする。きっとこの場にいれなかっただろう。

「メルツ。あと気になったんだが。なんで俺が発動するまで出てこなかったんだ？シュリには見えたんだろう？理由とかあるのか？」

「そうだわ。確かに。別にもっと早く出てきてくれてもよかったのに。」

シュリは１０年間知り合いや心の寄せあう者は１人もいなかった。

メルツが居てくれたらどんなに嬉しかったか。

『私自身、それはわかりませんの・・・１０年前アナタの母が殺害されたあとからの記憶が曖昧ですの。気がつくと私はヨシノのドアに封印的な感じになっていましたの。もしかしたら神様がそうしたのかも知れません。』

メルツはそういうとヨシノの肩に座る。
しかし。神が干渉。それはものすごいことだ。この世界に何億人住んでいるかは知らないが、その中、４人しかいない高位精霊を封印、２つもの制約付き能力を与えられたヨシノ。

一体何を望まれているのか。

わからない。でもシュリを助けろ、ということなんだろうな・・・きっと。そうあってほしい。

「まぁ、疑問も残るけど、能力はわかったわ。話変わるけど、今後はどうするつもり？何か考えがあるんでしょう？」

ベットで足を組みかえるシュリ。せめて女の状態でやってほしい。所々の仕草が女らしいのでつい、目がいってしまう。

「ん？あぁ。はっきり言って、このままじゃあこの国はとてもじゃないが取り返せない。」

この国の大きさは3県ぐらいだろうか？あまり大きくはない。人口もそこまで多くはない。エルフやドワーフがメインの国で、この２種は出生率も多くないことが原因ということだが。
しかし。こちらは3人。正確にはハーフエルフ隊が手を貸してくれ

るだろうが、きっと本当に国を取り戻せる手前にならないと力は借りられないし、貸してはくれない。彼らも半信半疑だろう。いくらジョセフ部長が説得しても。

国を取り戻せるだけの力があると示さなければならない。

「俺の推測だが、この国がここまで荒れているなら、反乱軍的なものはあるんじゃないか？そこと手を組む。どうだろう？」

ヨシノが元の世界で読んだ小説では、圧政には必ず対抗組織があった。この国は絵に描いたような圧政。きっとあると踏んでの作戦。

「私は・・・知らないわ。なにしろほとんど森の中だったし。」

『私も・・・知らないわ。なにしろドアの中だったし。』

真似をするメルツ。少し可愛い。

「まぁ、この町にはギルドがあるんだろ？そこにいけば少しは何か情報があるんじゃあないかな？今から俺は、行ってみたいと思うんだが。」

2人が知らないのも無理はないと踏んでいたヨシノは、落ち込む様子もなくそう切り出す。

「でも、もし仮にあったとしてよ？その人達は助けてくれるかしら・・・私の評判は聞いたでしょ？無理なんじゃないかしら？最悪殺されるわ。」

「ジョセフ達は国側の人だから、その辺は情報操作はされていた、と思うし、反乱軍があるとしたら、その中心人物は相当な切れ者だ

ろう。じゃなければ誰もついてこない。きっと手を貸してくれる。こちらには情報という武器と、シュリもいる。最悪の場合は俺の能力で全力で逃げる。」

まだ乗り気な感じではないシュリ。きっとヨシノを巻き込み、さらに危険な場所へ行かせることになるのが嫌で仕方ないのだろう。

「・・・大丈夫。俺は死なない。シュリのことも必ず守るよ。」

そっとシュリの手を握る。

ビクっとなりながらも伏せていた顔を上げるシュリ。少し頬が赤いのは気のせい、ではないだろう。

「ヨ、ヨシノ・・・」

潤んだ瞳で見つめてくるシュリ。良い雰囲気だ。

でも。

「な、なぁ。頼むから元のシュリになってくれないか？」

そう。このままだとただのＢＬ。気持ちものらない。切なすぎる。

「あ・・・忘れてたわ。あはは。」

絶対気付いてただろう・・・俺の純粋を弄びやがって・・・

第１５話　街。

話合いも一息つき、１階にある食堂に赴く。
宿の食堂、というより小さいカフェのような印象。
女性が好みそうな薄いピンクのテーブルクロス、一輪差しに咲く名前のわからないが白いユリ風の花。全体のバランス、雰囲気を考えるときっと女性の店主なのだろう。

「すみませーん。食事したいんですがー。」

見当たらない店主を呼ぶ。そして奥から声が。

「はぁーい！少々おまちくださーい！」

しばし待つと奥から黒い髪の女性。３０代ぐらいか。髪をシュシュらしきもので横でまとめていて当然だがエプロン姿だ。すっきりとした顔立ちで、美人さんだ。先ほど案内してくれた人の奥さんだろうか。少し年上に感じはするが。

「はい！いらっしゃいませ！２名様ですね？そちらの席にお座りください！・・・今メニューを持ってきますね！」

ハキハキとしたしゃべり口調は好感が持てる。２人は言われた、３つのテーブルのうち奥の厨房近くの席に座る。時間が少しずれた為か客は２人のみだ。
そして座るとすぐ、メニューと水を持った店主が来る。

「決まりましたら、お呼びください！」

軽く会釈をして、厨房の方へ下がって行く。２人はメニューを見ながら各々考えている。
シュリは、こういう場、街中にある店に食べに来た記憶は無く、そこに書いてある料理は本で読んで知ったりするものばかりで戸惑う。ヨシノは、ただただ驚いていた。なぜなら書いてある料理ほぼ全て、知っているのだ。
パスタ、オムライス、リゾットなど。確かに材料となる食材の名こそ違えど、ジャガイモやニンジン、ピーマン等が存在するのは知っていた。しかし料理名はもうまるっきり、そのものだった。やはりこの世界での流人の影響は大変なものなのだろう。
そのうち料理の鉄人いや流人に出会えるかもしれないな。

「・・・さて、シュリはどうする？俺はボンゴレにするよ。」

「わた・・俺は・・・んん・・・このオムライスにする。」

散々悩んだシュリは何か必死の形相で言う。来たことがないことを知らないヨシノは少し不思議がりながらも、店主を呼んで注文する。
料理を待つ間、思いつくようにシュリはヨシノに問いかける。

「・・・やっぱりシュリはやめたほうがいいんじゃない？」
「そうか。そうだな。んじゃ料理来るまでに考えるか。」
「かわいいのがいいな・・・」
「いや駄目だろう。男なのに。だろう？ガンテツ。」
「ガンテツ？！強そうだけれども！」
「んじゃサブロウ。」
「呼ばれても絶対反応しません。したくない。」
「えーわがままだなぁー」

「いやもっとマシなのだしなさいよ！」
「シュリ男」
「舞い戻った！」
「あ。シュリオ、チュリオ？」
「・・・いやシュリオでいいですはい。」

ヨシノのセンスに驚愕するシュリ。いやシュリオ。
そんな話をしているうちに料理が届く。ボンゴレはやはりアサリのような二枚貝のパスタだ。オムライスもしっかりケチャップまである。なにはともあれ意味不明な料理より知ってるものの方が安心するのか、ヨシノは感謝の気持ちで一杯になる。
シュリオは初めてみるオムライスにどう手を付けてよいのか困惑していた。

食事が終わり１６エール支払う。大体わかったことは１エールは１００円ぐらいなのだろう。
愛想の良い店主の笑顔に見送られながら街にでる。時間は２時ぐらいか。先ほどよりは人通りがある。来た道を戻りギルドを目指し、歩いていると来た時には居なかった武器の露天商があった。ヨシノは武器が欲しかった。ドア氏を持っているとはいえ、これではただのドア職人ぐらいにしか思われないし、人前で能力を使うわけにもいかない。
少し見てもいい？とシュリオに声をかけ、ズラリと並んだ武器を見る。

「・・・いらっしゃい」

横からのっそりとした声を掛けられる。ドワーフだ。がっちりした肉体で低身長。髪はぼさぼさ茶色。顔はどことなく疲れている。

「あ、すみません。武器を見せて下さい。」

「・・・どんなものを探してるんだい？」

「初心者なので、軽くて使いやすいものを。」

「ふむ。あまり筋力は無さそうだから・・・ここらのはどうだい？」

失礼なことを混ぜつつ取り上げたのは三日月刀、シャムシールという形の刀だった。その曲がった形はなんだか盗賊を彷彿とさせる。まぁつまりは盗賊のような人でも使える、ということか。ヨシノの本音は日本刀が良かったのだが、そこには中世風のものしかない。実際使いやすそうなものはシャムシールしかなかった。

「買います。いくらですか？」

「２００エールだ。鞘は付けてやる。」

ヨシノが答える前にシュリオが言う。止めようとするが目で制される。

ほらよ。と手渡され、腰に付けながら囁く。

（どうしてかったんだ？）

（これからギルドに行くのでしょう？なら怪しまれるし、軽く見られるかも、でしょ？お金は大丈夫。私結構持ってると思うわ。）

銀貨２枚で支払う。銀貨１枚で１００エール。ちなみに１エールは真鍮のような小さい貨幣で、１０エールは銅。支払う時、シュリオのサイフ、袋をみると、そのどれでもない金貨も入っていた。一体

いくら持っているのだろう。

王女だけに金銭感覚が崩壊している可能性もあるので、ヨシノは一応気を付けよう。と心に決めるのであった。

第16話　ギルド。

「あと、その服はどうする？」

腰に付けたシャムシールを触っているヨシノにシュリオが問う。
良く考えてみれば、服は元の世界のものでパーカーとジーパンだ。
この中世風の世界ではかなり目立つ。一応シュリオから借りた黒い外套を上から羽織ってはいるが。これでは自分は流人です。と名乗って歩いているようなものだ。
この国に一体何人の流人がいるかは知らないが、知らない服＝流人又はその関係者と思われる。
流人の影響がここまで出ている世界だ。重宝される半面、面倒事も多いだろう。

「そう、だな。服を買うか。悪いけどお願いするよ。」

そして二人はギルドへ向かう途中の服屋に寄る。ここは露天ではなく木造の建屋だ。古着屋のように所狭しと服が掛けられている。
シュリオはやはり女の性なのか、なんとなく上機嫌で服を選んでいる。あれで間違って女物の服でも試着したら面白いと思いながらヨシノは自分の服を選んでいく。

小一時間たったころ、ヨシノは結局シュリオの見立てで黒い麻らしきもので出来た上下を選び大き目のショルダーバックを購入。そこに元の服を入れる。
流石に靴だけはこのままで行きたいと言い、店をでる。
立て掛けていたドア氏を横に持ち、ギルドに向かって歩き出す。

「それ、置いてくればよかったんじゃない？」
と、ドア氏を指差すシュリオ。確かに。このままではただの建具屋さんだ。しかし当初は武器も無かったため、心元無かったのだ。
「まぁなんか大荷物になったけど、ギルドはすぐそこだし。」
店先から１００メートルほどの所に入ってきた街門が見え、その左手のほうに石造の建物が見える。恐らくあそこが門番の言っていたギルドだろう。若干ではあるが人の出入りが他より多い。
近づくにつれ、いかにも冒険者、という格好のエルフが多いことに気づく。ドワーフもいるが、山賊にしか見えない。
そして二人はドア氏を横に立て掛け、ギルドのトビラを開ける。
「中は以外と人、少ないのね」
と思わず女言葉で話すシュリオ。確かに。何組かのグループが円卓を囲み何かを飲んでいる。バー的な雰囲気があるため酒なのかな？とヨシノは思う。
奥にあるカウンターには椅子が無く、何人かが起っている。全員エルフだ。その横には木でできたボードが。紙が数枚貼られている。
これが依頼なのだろう。
一言で言えば。活気がない。
みんな椅子に座り何か話している。昼間から酒を飲み、深刻な顔をしている人もちらほら。
とりあえずカウンターに向かう。
「・・・いらっしゃいませ。ご用件は？」

メガネを掛けた若い娘が、やたらテンションの低い声で話す。

「登録をしたいんですが。」

「はい。ではここに名前と種族をお書きください。」

すっと二人の前に差し出される紙。しばし考え、ヨシノは人族と書いた。ここに流人と書いたらきっと問題になると察してのことだ。シュリオも偽名でシュリオ。そして人族と書く。

「はい。ありがとうございます。シュリオ様とヨシノ・フジカワ様ですね。・・・・フジカワ様？」

「はい？」

まるでロボットのように言葉を反芻したメガネっ娘。なにかに気付いたのか、少し取り乱す。非常にわかりにくいが。そして、少々お待ち下さい。といって奥に入る。

ヨシノは失敗したかと思う。自分も偽名にすればよかったと。ヨシノ・フジカワという名はこちらではまず、無い。
逃げるにしても状況が掴めない今、動くわけにはいかない。
ヨシノが1人苦悩しているとメガネっ娘が戻ってきた。

「すみません。別室にて対応します。ついてきて頂けますか？」

「・・・なぜ・・ですか？」

「マスターがお会いしたいのだそうです。」

マスター。
ギルドマスター。確かにここで会うには問題がありそうだ。目立ちすぎる。
しかし、いきなりなぜ？と思い悩むが、会ってみて判断しても良いだろうと結論を出す。

いつでも逃げられるよう、ドア氏を持ってきてメガネっ娘に付いてカウンターの右奥にある通路に向かい、さらに奥へと歩いていく。
最奥には少し豪華なドアがあり、メガネっ娘が（コンコン）とドアを叩く。
すると中から「どうぞ」と言われドアを開ける。

「失礼します。お連れしました。こちらの黒髪の方がヨシノ・フジカワ様です。」

「おお。そうか君がそうか。・・まぁ立ち話もなんだ。座ってくれ。」

出迎えてくれたのは４０歳ほどの男。白髪混じりの黒髪。絶やされない笑顔。ベンチャー企業の社長、という印象だ。
ヨシノはまさか、と思った。この世界では黒髪は多くは無いが存在するし途中すれ違った人もいて、顔はほりの深い顔立ちで外国人を思わせる人ばかりだった。
しかし。目の前の人物はアジア寄りの、まさに日本人そのものの顔立ちだ。

「・・・あなたはまさか。流人ですか？」

「んん。まぁまぁ掛けたまえ。」

初めての同郷、流人の可能性に驚くヨシノを落ち着かせるように自分の座るソファと対になっているソファをすすめる。シュリオが先に座り、そしてゆっくりヨシノも座る。
そしてギルドマスターは座り直し、二人を眼前にとらえ、言った。

「さて。藤川君。初めまして。私は藤堂。流人だ。5年前、流されてきた。」

第17話　悪は悪。

スーツに近い、淡いグレイの服に白髪混じりのオールバック。整った顔立ちで笑顔を絶やさない。これで笑顔がなかったら怖い印象がありそうな人物。
藤堂は流人だと、二人に告げる。

「・・・俺、いや私も実は流人です。気付いておられるとは思いますが。」

思わず笑顔になり、初めての仲間、いや同郷人に心躍らせるヨシノ。

「ほう！やはり！いやぁ～カウンターの子に言っておいたんだよ。変わった名前の方が来たら教えてくれとね～。君はどこの県なんだい？」

「はい！自分も嬉しいです。自分は・・・」

藤堂と盛り上がるヨシノ。身を乗り出すように話し始める。シュリオはその様子を見ながら1人思いふける。

（確かに良さげな人だけど、始めから笑顔を向けてくる人間に碌な奴はいない。）

シュリオは王女時代、自分の周りをうろつく輩達を思い出していた。いつも笑顔で取り入ろうとする者達。少しでも甘い思いをしようと群がる蛾。
その印象がこの藤堂とも重なり、あまり良い印象ではないままメガネっ娘から出された紅茶を飲み、二人の会話を聞く。

そして一時間弱。

「いやぁーまさか日本が今そんな状況とはねぇ。兆候はあったけどねぇ～。そんな状況ならこちらに来て正解だったのかもなぁ～」

「ところで藤堂さん。お聞きしたいんですが。向こうこ帰れる方法はないんですか？そして流人はこの国には何人ほどいるんですか？」話の節目に聞きたいことを入れる。藤堂は紅茶を一口。そして話し出す。

「無い。・・・今のところはね。流人を多く抱える夾国では研究されているようだけど。この国には流人は少ないがいるよ。大体が要人になっているけど。あ・・・でも盗賊まがいのことをしている輩もいるようだけど。」

「盗賊？あの世界から来たのに盗賊ですか？」

この世界に比べれば遥かに平和な世界からきたのに、なぜ？と疑問が残る。

「むしろ、だから、かな。この世界は見てきたと思うが中世風で文化レベルも近い。大きく違うのは魔法という概念があること。だろう？だから当然、貧富の差も激しく奴隷制度もある。まして、ヨシノ君はわからないかも知れないが、この国は荒れている。物凄くね。だから彼らは考えたんだと思う。」

また紅茶を飲み、間を開ける。テンポをとっているように。

「彼らは良くしたいと思ったんだ。この世界を。そして考えた。ほら昔いた、『義賊』というやつをさ。貴族から金を奪い庶民に与える。まぁヒーローごっこだね。でも最近規模が大きくなってきたようでね。国から要請があったんだよ。実は。」

「要請ですか？まさか討伐の？」

「うん。討伐、というより殲滅。近場のギルドと合同でね。あまりみんな乗り気じゃあないみたいだけど。」

テーブルで飲んでいた者達を思い出す。確かに覇気がない感じだった。冒険者とはいえ国は腐っていて、悪いことだが庶民の味方を駆逐するのは気が重いのだろう。

「悪は悪なんだよ。ヨシノ君。いくら正義を掲げていても所詮盗賊。悪なんだ。君達も参加するかい？」

落ち込んだ様子のヨシノに言う藤堂。

「・・・考えておきます。ちなみにいつなんですか？」

「明後日の明朝からだよ。門集合。ここから１０キロの森にアジトがあるらしいから旅の用意は軽めで大丈夫。・・・ところで君の特殊能力はなんだい？把握するために、教えてよ。」

「・・・自分のはこのドアを軽々振り回すことが出来ること。です。しょぼい能力なんですよ。」

といって片手で本を持つように手に取る。藤堂はそれを軽く触れ、少々驚く。

「これ物凄い重いよね？・・・なるほど。わかった。」
能力だと理解したらしく藤堂はなにかを悩みはじめる。恐らくヨシノの配置を考えていたのだろう。
「では自分達はこれで失礼します。」
「おぉ・・すまなかったねいきなり。楽しかったよ。ありがとう。あ、あとギルドには登録しておくから、カウンターでカードを受け取ってくれ。」
「ありがとうございます。また来ます。」
「そちらの方もすみませんね。女性を除け者にしてしまって。今度うまいケーキを用意させますよ。」
そして部屋を出てカウンターでカードを貰う。
外に出るともう夕方になっていた。二人は宿に帰りながら話し始める。
「私が女性、って見破っていたわ。あの男食えないわね。」
「ああ。気を許せる感じではなかった。なにか腹に持ってるな。」
「これらかどうするの？」
「反乱軍が本音は良かったが。その『義賊』、仲間に引き込もう。」

第１８話　そして二人。（前書き）

もういっそ迷走しようと思います。

第１８話　そして二人。

外は夕暮れ。
日の長さは本当に夏の、そう夏の日本そのもので。
きっとこの夕日だけを見たら、元の世界に戻ったと勘違いしてしまいそうだ。

でも現実は。

異世界に流され、国レベルの問題にいきなりぶつかり今はその逃避行。
そしてクーデターの画策。仲間を求め義賊との接触をしようとしている。
こんな面白いと思うと同時に展開についていけず怯える自分がいる。
そんな怯える自分を抑えていれるのはシュリという少女の存在。
いや実年齢は自分より上だが、まるで人形のような完璧な造形を持つその姿は女神と称されても良いレベルだ。
シュリの為にも俺がしっかりしなければ。

そして、そんな俺の心の支えであるシュリは今。
部屋に備え付けてあるシャワーを使用しているのだった。

シュリオ（男の姿）では魔法力を使い続けるため、部屋に戻ったとき解除したのだ。

なぜだ。なぜこの文化レベルでシャワーなぞあるのだ。いやありがたいが。
なんでも使用者が魔法を流すと使えるらしいが。
というわけで。俺は今、己の煩悩と絶賛戦闘中だ。

シュリ自身きっと見られても気にしないだろう。なにしろタオルで家の中を歩いていたほどだ。俺がいるのにもかかわらず。でも。俺は慣れることは無理。絶対無理。

しかも2人部屋。

・・・・まぁー。少しぐらいなら・・・助けるんだしさ？と囁きが聞こえる。

というか少しってどのくらい？アレまではさずがにまずいだろう？いやでもその手前までなら・・そこで止まれるのか？俺！

むーーーりーーー。

どこまでも突き抜けるのさ俺の魂は。

というわけでちょっとも無理という方向で。

ダムの決壊は誰にも止められんからな・・・

そんな自分との対話中のヨシノの前に、カチャッとドアを開けシャワーから出てくるシュリとメルツ。案の定タオル1枚。それを見越して夕日を見ているヨシノ。

「ふ～気持ちよかった。ヨシノも入れば～？」

「お、おうぜ。・・・その前に服を着てくれよ・・・そっちを見れないからさ」

『このヘタレ』

「うるせぇ！メルツ！この幼児体型！」

『いやいや幼児体型だからこその需要もあるのですよ？』

「どこの変態さんだ！」

『いやぁ初めて会ったとき、舐めまわすように見てましたものねぇ

？』
「俺のことだった！」
「ヨ、ヨシノ・・・本当に？だから私に手を出さないの？」
「いやいやシュリさん。手を出してくれ的な話はそこの幼児がいないときに。」
『誰が、楊貴妃だ！』
「素敵な勘違い！」

そして小一時間後、ヨシノもシャワーを浴びる。
頭をゴシゴシ洗っているときドアが開け放たれ、メルツに裸を見られたが。
余談。鼻で笑われた。

3人は互いのベットに腰掛けながら話し出す。

「それじゃあ明日の話をしよう。」

「ヨシノがなぜ幼児体型に激しい欲望を感じるかの話？」

「もういいってそれは！」

「ごめんごめん。つい、ね。で、どうするの？やっぱりギルドが動く前に義賊の所に行くの？」

「そうだな。その情報もきっと良い土産になるしな。ただ気になるのは・・・」

「藤堂？」

「そう。どんな能力かも、何もわからないがかなり危険な臭いがす

る。恐らくだけど、俺達が先に向かうこともわかっているはずだ。だから明日は朝早くや夜遅くではなく昼間、空から門を通らず行こう。」

「いや朝や夜行かない理由はなんとなくわかる。でも空を飛んだら見られてしまわない？」

「そんなときこその俺の能力だろう？光の精霊に頼んでカモフラージュしてもらおう。」

「なるほどね。普通、精霊使いでも光や闇系統は使えない人が多いから失念してたわ」

その後、雑談やこれからのことを話していると、お互い朝早かったせいか睡魔が襲ってくる。

「んじゃあそろそろ寝ようか。」

「そうね～おやすみ～」

『おやすみなさい～』

そして3人はベットに入る。

外からの月明かりしかないこの部屋に、少しして、寝息が起ち始める。

しかし。

眠れない者もいた。

眠れん・・・少し手を伸ばせば最高の世界が待っているのに・・・・

いやいや明日の為に眠らなければ・・・

そういえば。シュリは言っていたな・・・なぜ手を出さないのかと・

・・
これは許可なのか？むしろいかないのは失礼なのではないのか？
悶々とするヨシノはシュリのベットに背を向け耐え続ける。
そして1時間ほどたったころか。ヨシノのベットにするりと侵入するものがいた。

「・・・・シュリ？」

「ごめん。少し・・・こうしてていい？」

後ろから抱き締めるような行為ではく、ただ背中の服を握っている。

朝、起きた時、いなくなってない？

それは微かな、こんな月明かりの静かな夜だからこそ聞こえた、シュリの不安。
そんな微かな声でもヨシノの心を動かすには十分だった。

ゆっくりと振り向き見つめあう2人。
向こうのベットでは小さなメルツが大の字で寝ているのが見える。

「・・・・大丈夫。約束する。決して離れない。どんな状況だろうとね。」
「ほんと・・・？」
「俺は臆病で弱虫だけど、シュリがいるからがんばれる。そう思う。だから離れたくないのはシュリだけじゃない。」

2人は静かにキスをする。
触れるだけのキス。でも心の触れるキス。

明日がどうなるかもわからない。
離れない。なんて無責任なのかもしれない。
でもこの瞬間は確かに思えた。
絶対なんて絶対ないけれど。
ここには確かに絶対があった。

第19話　森。

じんわりと暑い日差し。身体を心地よい風が撫でていく感覚。
ふと、ヨシノは目を覚ました。
昨日の夜、隣で寝ていたはずのシュリはすでにおらず、窓の縁に座り紅茶らしき飲物を飲んでいた。

「・・・おはよう。」

「あ、起きたのね。おはよう。」

「起こしてくれればよかったのに。」

「疲れてたみたいだから、起こさなかったのよ。」

ん？とヨシノは疑問を感じた。

なぜだかシュリの言葉に棘を感じる。・・・疲れていた？疲れ・・・！昨夜俺は・・・いつ寝たんだ？！

「シュ、シュリさん・・・昨日、俺もしかして途中で寝ちゃった？」

「・・・知らない！」

シュリは外の方へプイッと顔を逸らす。
ヨシノはあまりの疲れで、キスを交わしたあと、眠ってしまったのだ。

ひたすら謝るヨシノの声で、今まで寝ていたメルツは起き出した。

『おはようございま・・・あれ？なんでヨシノさん、土下座しているんですか？』

「おぉ、おはよう。これ、は・・・あれだ！朝の体操だ！」

『なんでヨシノざんは、虫のように這いつくばっているのですか？』

「俺の話を聞けよ。」

『なんでヨシノさんは豚のように・・・』

「いやほんとすみません」

結局、メルツにも説教を貰う羽目になるヨシノだった。

「さて行くか！」

着替えや朝食も済み、気合を込めてヨシノが言う。シュリオに変化したシュリも緊張からか少し硬い表情で頷く。メルツはすでにシュリの服の中だ。

外に出ると、すでに太陽が高いからなのか、ぬるい風が身体を抜けていく。二人は裏路地に向かう。そしてシュリはシュリオを一旦解除する。２つもの精霊術を行使するのは相当な集中力が必要なためだ。ヨシノの場合は行使、というより頼んでやってもらう、という

形に近い。あまり集中力は使わない為いくつでも重複できるのだ。
ならば飛行と迷彩化、両方ヨシノが行えばよいのだが、そこはシュリ自身のプライドが許さなかったのだ。

「じゃあヨシノ、まず迷彩化して？」

「了解。・・・ところでどうやってやるんだメルツ。」

「・・・知らなかったの？」

よくよく考えれば。能力を使ったとき、ヨシノは無我夢中でどうやって能力を出したか覚えてないのだ。わかっていると、当たり前だと思っていたシュリに言うタイミングを逃していたのだ。
シュリの服に隠れていたメルツがチョコンと顔を出す。

『ヘタレですねぇ・・・。まずはそこを捻ってイメージするんです。どういう形になってほしいのか。どういう目的なのかでも大丈夫ですわ』

呆れ顔のシュリを尻目に捻る部分を見る。内鍵の部分だ。確かにあの時、（ガチャン）と頭の中でした気がしたが、リアルにしていたとは。と驚きつつも内鍵を捻る。
そうするとヨシノは光に包まれる。

・・・イメージはガサばらないような感じでいいか・・・

イメージの固定化とともに光が一気に収束する。そこに現れたのはゴーグルだった。
メーターはデジタル風にゴーグルのガラス部分に写っており、内鍵

らしきものは横に付いている。

「・・・ほんと凄いわねそれ。質量とか完全無視なのね。髪の毛はやっぱり赤くなるのは変わらないけど。あと周りの精霊のはしゃぎっぷりもね。」

「赤いのか？まぁいいじゃないか使えたわけだし。時間もなくなるから早速使うぞ？・・・
光の精霊さん。悪いけど頼むよ」

声を掛けると二人を光が包み込む。そうすると近距離でもお互いが見えないほどの迷彩化。というより不可視に近いのかもしれない。

そしてシュリは後ろからヨシノを抱きしめると風の精霊術を行使する。

「行くわよ！」

掛け声とともに、空に舞い上がる二人。街の真上に出ると、方向を確認。約１０キロ範囲に森は東にしかない。見つけると一気に向かう。

数百キロを短時間で飛べる精霊術のため、１０キロごとき1分掛からず着いてしまう。

森の端に着くと着陸し、迷彩化と能力の解除を行う。時間制限を考えると出来る限り温存しなければならない。

実際義賊との交渉が決裂した時のことを考えてのことだ。

シュリもシュリオに変化し、二人、森を見上げる。

深い森、という印象だ。帰れず～などの名前が付いていてもおかしくないほどに。

「魔物とか出そうな森だな。」

「そうね・・・そうだな。調べてから来ればよかったね・・な」

男言葉がイマイチできないシュリオ。
普通、森や山に入るときは必ず事前に調査報告書というギルド発行の本を読む必要がある。
その場所によっては危険な個所や植物、魔物や動物が生息しているのだ。
例えば毒受けた時、二人が持っている汎用の薬でもきかなくはないが、応急処置にしかならない。それ専用の薬でなければ、最悪死に至る。そのためその場所専用の装備で来なければならない。
自分の居た森と王宮しかしらないシュリと流人なりたてのヨシノは完全にそこを失念していたのだ。
しかし気付いたからといって、戻ることはできない。

「まぁなんとかなるさ。いこうシュリオ。」

「そうね。いざとなったらヨシノ助けてね?」

二人はゆっくりと森に踏み込む。
不安だらけだが、二人なら根拠のない希望が湧いた。

第２０話　不安。（前書き）

説明臭くなってしまいました。

第２０話　不安。

森に入って１時間。
不気味な鳥の声と荒くなってきた息だけがＢＧＭとなりつつ、二人は歩き続ける。

森は木々が大きく、光をあまり通さないせいか、草は生えておらず、隆々とした木の根が進路を妨げていた。元々あまり体力の無かったヨシノは肩で息をしている。
こちらに来てから、少々体力作りに励んだが、あくまで少々だったと考えながら歩き続ける。シュリオは森の生活が長かったせいか息一つ乱れていない。

「ほら、あそこでちょっと休憩しましょう？」

「あ、ああ・・・」

シュリオが指差したさきには、丁度よく根が盛り上がり座れる感じになっている。

腰を降ろし、持ってきた水を飲むヨシノ。

「もっと体力つけないとなぁ・・・シュリを守るはずが守ってもらうことになっちゃいそうだ・・・」

「その気持ちだけでも嬉しいわ。でもね。私は守られるだけじゃ嫌。お互い守り合いたいの。だから無理しちゃだめよ？」

すでに男言葉を諦めたシュリは、かわいい仕草で言う。なんとも言

えない気持ちなヨシノは歯切れ悪い感じで「お、おう」と言うだけだった。

「おうおう。お前らホモか？変なもん見た気分になっちまったじゃねーか！」

「！」

いきなり後ろから声をかけられ、武器をとり構える二人。
声を発した男は、やたら細身のエルフ。銀色の髪を後ろで一つに束ねている。格好は冒険者、というより科学者のような白いローブを羽織っており、街中にいるような格好だ。

「侵入者って聞いたから見に来てみれば、ただのホモかぁ。ここは乳くり合うとこじゃあねぇ！迷惑だ。帰んな！」

「違う！ここには用があってきたんだ！お前は義賊か？」

「・・・へぇ。それ知ってるということは、生かしちゃあ、か・え・せないなっとぉ！！」

言葉の終わりと同時に投げられるナイフ。咄嗟にドア氏で回避する。

「は、話を聞いてくれ！交渉にきたんだ！」

「・・・・交渉だと？俺はここに侵入したものを排除しろと命令されてんだ。交渉したければ俺を倒して上の奴と話しなぁ！『ウィンドカッター』！」

「く、『風の壁』！」

男の手から飛び出したコブシぐらいの風の塊をシュリオの作りだした、風の壁が弾く。

「へぇ。精霊術かい？やるねぇ。俺楽しくなってきちまったよ。」

「シュリオ大丈夫か？」

「持続系じゃなければある程度は、ね。」

元々、精霊術は集中力が必要とされる。同時に2つもの精霊術を行使するのは相当なものだ。だがシュリが今行使している変身の精霊術は風系統と光系統に付属する術。そして持続。掛ければある程度、集中力、魔力を必要としないため、持続系ではない防御や攻撃術を使うことが出来る。つまり飛行等の持続系は重複行使できない。といっても、シュリの高い魔力と研鑽による成果といえるが。

「使うか」

「待って！今はまだこんな奴に使わないほうがいい！」

「こ、こんな奴だと！くそが！『リヴァイアサン・テイル』！」

「な、上級魔法を無詠唱で！」

男の周りに大量の水が螺旋状に形成されていく。そして高回転しながら周りの木をいとも簡単にへし折っていく。広域魔法でさらに持続系。瞬間的に行使する防御系では無理と判断したシュリはヨシノの手を引いて後ろに飛ぶ。

しかし、男を中心に回る津波のような水は、男が動くのと合わせて近づいてくる。

「ほぅらどうした？こんな奴呼ばわりした奴に殺される気分はよ？」

シュリオは内心失敗したと感じていた。侵入者の排除ごときでこんなレベルの男が来るとは予想していなかった。まさか無詠唱で上級魔法の行使。

詠唱とはイメージの固定化。上級になればなるほど固定化は難しく、無詠唱で使えるものはそうそういない。

まして魔法でだ。

魔法とは元は人間が編み出した自分の魔力１００％で形成されるものだ。精霊術とは根本的に違う。精霊術は精霊の力を借りる為、５０％ぐらいの魔力でこと足りる。使う為には素質が必要だが。

魔法で上級を無詠唱。完全に男の力量を測り間違えたのだ。

「ほら！ボケッとしてっと、お仲間が死んじゃうよ！」

体力のないヨシノはもうそこまで来ている津波に飲まれようとしていた。

「ヨシノ！」

「ち、ちくしょーー！」

ヨシノはもうヤブレカブレだと言わんばかりにドア氏を前に突き出す。

高回転によりバラバラもしくは弾き飛ばされると誰もが、ヨシノ自

身ですら思った。
しかし。

ドア氏と津波が接触した瞬間。
男を取り巻いていた水全てが霧散したのだ。

「は？」
「へ？」
「ん？」

呆気にとられる面々。男は開いた口が塞がらない。それもそのはず。上級魔法が防御されたのではなく、解除されたのだ。解除魔法または相殺はあるが、上級ともなると簡単ではない。まして瞬時に対応することなど不可能に等しい。

シュリオはいち早く正気を取り戻し、男の背中に周り首筋に手刀を入れる。

「ぐはっ・・・」

男は意識を失い前のめりに倒れる。

「ふぅ。なんとかなったなぁ。」

その場に座り込むヨシノ。
大量の水分が霧散したためか、しっとりとした髪をかきあげる。

「いやほんとありえないドアね。それ。上級魔法を解除、いや相殺、

かしら。そんな芸当ができるなんて。」

「元はただのドアだったんだけどなぁ。でもさ。わかったことがある。」

「なに？」

「俺はこのドア氏無しでは・・・ただの中年だと言う事さ。」

実際山道や逃げる時にも、体力の無さ、反応の遅さは最悪な状況だ。もし今後、なんらかの問題でドア氏を手放したとき。
ヨシノは腰の三日月刀で、どこまで戦えるのだろう。
きっと簡単にやられてしまうだろうと推測できる。そのことを思いヨシノは恐ろしくなる。
ここは前の世界より遥かに治安は悪い。しかも魔法もある。不安要素をどう克服するか。今後の課題になってくる。がんばろう。と気持ちを無理やりでも前に向けさせる。
ウジウジ悩んでも解決はできない。

「シュリ。きっと強くなるから。だから」

「大丈夫。一緒に強くなりましょう？」

ふふっと笑うシュリオ。シュリ自身、課題は多いことに気付いていた。変身している以上、下級魔法、または下位精霊術しか使えない現実。確かに変身を解除すれば、最上位まで行使はできる。しかしこの国、今の現状で解除して闊歩するのは自殺行為のなにものでもない。集中力。そして胆力。それが足りないと感じていた。

「とりあえず、こいつをそこの蔦で縛って、前に進もう。」

「そうね」

腰の三日月刀で蔦を切り、手首を足首を縛る。命を奪うこともできるが、そうしてしまうと禍根を残しかねない。あくまでここには仲間になるために来たのだ。

「さて、行きますか」

心に大きな不安を残しながら。
二人はさらに奥深くへと歩き出す。

第21話　炎。

夏のような陽気にもかかわらず、高く生い茂る木々のせいか少し肌寒くすら感じる。
きっといつもなら、静寂に包まれ、これ以上に寒く感じることだろう。

いつもなら。

いきなり現れた義賊と思われる男を倒したヨシノ達は、またしばらく奥へと歩を進めていた。あの男の後、警戒を強めながら慎重に歩いてきたが、誰とも遭遇せずにとうとう、目的地らしき建物が見えてきた。
そこはまるでシュリが住んでいた家のようだった。木をまるで魔法で形を変えたような（実際あるのかもしれない）大きなログハウス。
窓が多く、2階建てだ。
そして。
様々な格好をした数十人に囲まれていた。
そこまで一緒なのかと苦笑しつつ陰に隠れて様子を見る2人。

「君達は、すでに包囲されて～います！」

突然、大きな声で家（館と言うべきか）に叫ぶ数十人の中心に立つ人物。
その少し優しそうで、丁寧な声は最近、聞いた声だった。

明日討伐に行く、と言っていたギルドの長、藤堂。
2人は驚きを隠せなかった。まさか、と。
初めて会った人に嘘をつくとは。仮に自分達のことを義賊の仲間だ

と勘ぐり、嘘をついたとしてもメリットがない。
討伐隊が行く。という事実自体教える必要性がない。
むしろ警戒させるだけだ。情報を混乱させる気だったとしたら、なおさらだ。昨日今日することではない。
ヨシノの頭が絶賛混乱中だったが、シュリが変身を解いたことで現実に戻る。

「どうしたの？」

「きっと戦闘になるわ。そして・・・私達は義賊となんとしてでも仲間にしなければならない。この国を思う同志として、ね。」
「な、なら俺が能力でまた失神させたり眠らせれば・・・」

「あの藤堂という男。侮れない。絶対ヨシノにこの情報を言えば、ここに来ると踏んでいたと思うわ。だからここでヨシノの能力は使わない方がいい。何か罠があるかもしれない。」

「でも、姿を見られたら！」

少し強い口調になる。しかしヨシノ自身、そこは考えた。自分達に言うメリット。
それはここに自分達をおびき寄せること。そして捕まえるなり、罪を着せるなりして引き込もうとしている可能性。
ヨシノの便利な能力を見せるのと、シュリの姿を見せるのでは主旨は違うが危険度が増す気がするが。

「隠れてでも精霊術は行使できるし。なにより変身しながら戦える相手じゃ、ない」

数十人の姿も持っている獲物も様々。大剣を背中に差した者、いく

つもの宝石らしきものがはまった杖を持つ者。
きっとギルドの人達なのだろう。ジョセフ達のような統制のとれた感じこそしないが、個々の錬度は高そうな人達だ。
はっきり言って、勝てそうもないとヨシノは思う。しかし、シュリの気持ちもわかる。折角この国を良くしたいと望んでいる者達を、みすみす見逃せないのだ。
隠れ住んだ１０年を取り戻したいのだ。

「・・・わかったよ。でも絶対姿は見られちゃ駄目だからね？俺が全力で防御するから。」

「ありがとう。」

少し笑うと、腕を前に突き出し、詠唱に入る。長い詠唱だ。魔法や精霊術は詠唱が長いほど上位で非常に集中力がいる。

そのとき、また藤堂が話し始める。

「と、いうことで～。アナタ方には死んでもらいます～。降伏は要求しません。逃がしもしません。ただ楽に殺して差し上げます。ここにはＢからＣのギルド会員を招集しています。だから。」

すぅっと息を吸う藤堂。一瞬の、静寂。そしてこれから始まる惨劇を予感させる時間。

「諦めて下さい。」

藤堂の言葉とともに、走り出すギルド会員達。詠唱を始める者も多数見える。
しかし先に始めていたシュリの方が早かった。

「・・・・・意思を持ち蠢け土の化身・土形！」

突然、ギルド会員達の足元が揺れ、走っていた者も詠唱していたものも手をつき耐えようとするも、大地は隆起していく。

「みんな！ゴーレムだ！避けろ！」

誰かかが叫び、それぞれに転げて逃げるが、何人かは巻き込まれ、みるみる隆起した土は形を成していく。そして出来上がった形は、全長１０メートルはある、蜥蜴だった。

通常、ゴーレムとは人型が一般的だが、２足歩行というのは非常にバランスが悪い。しかもいくら上からの攻撃が強いからといっても、デカイために速度が出ず容易に逃げられる。砦や城の攻撃には向いているが人間への攻撃には不利。そう踏んだシュリは地を這う生物でしかも、個人的趣味でトカゲを成型した。

ゴーレムの利点は一度与えた魔力で動く為、常時魔力を使わない。もっと長い時間使用したいときは追加で魔力を供給すれば良い、という点だ。意思もあり、術者の意思を尊重して動く。

物凄い便利だが成型の詠唱時、緻密な設計図を作らなければならない為、突発的な状況では使用しにくい。

ビュオオーー

尻尾で薙ぎ払いをし、突進を繰り出す蜥蜴。いくらギルドの人間が錬度が高かろうとも当たれば無事では済まない。状況は乱戦になってきていた。

その中シュリは初歩風精霊術である『かまいたち』を木々を移動し

ながら連打する。
そうすることで人数を知られないようにするためだ。
周りからの攻撃と内側からの攻撃で、ギルド会員達は完全に防御に回っている。敵の位置も人数も把握できない為、隙を覗っているようだ。やはりと言うべきか、あまり攻撃が効いている感じではない。あくまで足止めにしかなっていなかった。

そんな中。1人何もできない男がいた。
ヨシノである。
物凄いスピードで走るシュリを追いかけるなんて芸当、できるわけもなかった。何しろ体力は、ここにくるまででかなり消費してしまっている。
5時間ほど歩き続け、さらに走るなんて体力元からなかった。
しかもシュリの速度は恐らくヨシノの全力疾走より倍は早い。
かといって囮になろうと飛び出ても、瞬殺されるのは目に見えている。
この木の陰に隠れて、状況を見ている事しか出来ないのだ。

その時だ。また藤堂が動く。3人ほどに守られている。なんとその3人の中にはあの、メガネっ娘もいる。

「な～にやってんですか？火でアブって盗賊どもを出せばいいじゃないですか？はら！そこの！ちゃっちゃとやりなさい！」

近くに居た魔法使い風の男に言うと、しどろもどろになりながらも詠唱を開始する。そして。初歩だったらしくすぐ、詠唱は終わり大きなログハウスに火が着く。
1人が行使したと思うと次々と火の魔法を打ち始める。
最初の火は炎となって燃え盛る。

「な！！」

動きを止め、炎を見るシュリ。
例え、どんな状況でも。
この国ではやってはいけないことがある。
それは、森では炎系の魔法を行使しないこと。
森とともに生き、森の恵みが支えになっているメイエールでは、この常識は誰でも知っているし、当たり前のこと。
それを簡単にやるのを目の当たりにして動きが止まったのだ。

「いたぞ！あそこだ！」

片手に剣を携えた男が叫び、距離を詰めてくる。はっとしてシュリも途切れた『かまいたち』を行使するも、駆けつけてきた数人に弾かれジリジリと追い込まれる。
そして炎を消さなければ、という思いも重なり余計に集中できず初歩しか行使できない。
マスターの危機に気付いた蜥蜴が近づいては来ているがいかんせん足が遅く、他のギルド会員に阻まれている。

「まぁ。こういう状況なら、仕方、ない、よね？」

第２２話　白い世界。

「まぁ。こういう状況なら、仕方、ない、よね？」

シュリの前には赤髪の男。

左腕には以前、シュリの家で見せた大砲が付いている。
ヨシノは、立ち止り窮地になるシュリをみるや能力を発動。
隠してどうにかなる可能性もあった。しかし自分の大事な人が傷つく事とどちらが優先されるか。ヨシノにとってそれは考えるまでもなかった。

「放水！」

掛け声とともに大砲から怒涛のごとく射出される大量の水。それはまるで消防の放水。
水圧で目の前まで迫っていていた戦士風ギルド会員達は、成すべなく後ろへ飛ばされる。

ギルド会員達は突然の攻撃に驚き、こちらに向けて迎撃しようとするも、放水に阻まれ戦士達は前に出られず、魔法使いは集中できず魔法を発動できないでいる。
しかし。

「戦士は魔道師の盾になりなさい！魔道師は魔法壁を行使準備！足の速い者達は回り込んで陽動！」

藤堂が指示を出す。すると少しずつ連携し始めるギルド会員達。基本的な力量はあるようだ。ただ多人数での戦い、連携するというこ

とに慣れていなかっただけらしい。
このままではまずいと踏んだヨシノは、先ほど戦った科学者風の男を思い出す。
あの男が使った『リヴァイアサン・テイル。』あれは放出系だが、ゴーレムの要領でやれば
面白いかもしれないと考える。
ヨシノの能力の最大ともいえる利点はどんな難しい魔法でも、大体のイメージを思い浮かべながら精霊に頼むことで、成型することができる点だ。
勿論人を殺さない程度に威力は制限されるが。

「水龍をよろしくお願いします！」

そうヨシノが叫ぶとほぼ同時に、筒先から大きな渦ができ、見る間にトグロを巻いた大蛇に変化する。
ヨシノのイメージが大体過ぎた結果だった。

「・・・おういえす」

しかし大蛇は空中を飛んで、戦士達の側面や陽動をしかける盗賊風の者達をなぎ倒していく。見た目は大蛇だが、龍のような動きだ。
精霊達が空気を読んでくれたようだ。

シュリの出した蜥蜴も大奮闘していて、義賊達のログハウス前はもう、怪獣大戦争状態。
藤堂がまた指示を叫んでいるが大混乱だ。
その混乱に乗じて義賊のログハウスに向けて放水し始める。放水対象が物質に変わったせいか威力を増している。
シュリは水の精霊術を発動させ、ログハウスや周りの木々に大雨を

降らせる。延焼を防ごうとしているのだ。
しかし数十人の魔道師が炎を放ったため、炎は大きくなっている。
このまま2人で精霊術を行使していれば、そのうち消えるが、ギルド会員達も待ってはくれない。人に対して威力を制限されているヨシノの龍は、足止めになるが、完全には倒せない。シュリの蜥蜴は制限はないが、限界がある。
そして、ヨシノの能力にも時間がある。
このままではジリ貧なのは目に見えている。
どうしようか悩んでいると、
もう1人、いることに気が付いたヨシノ。

「そうだメルツ！俺の魔力を全部使って、ギルド会員達の意識を刈り取ってくれ！」

ヨシノの魔力量は常人レベルしかない。今行使しているものはすべて精霊達の力だ。
精霊は数多くいればいるほど力が増す。環境で存在する数の上下はあるが。
メルツは精霊を統べる者だが、メルツ自身にはあまり魔力はない。
契約した者から魔力を譲渡されることで精霊術を使うことができる。
厳密にいうと違うのだが。
簡単に言うと、ヨシノの能力に近い。違う点は譲渡された魔力を精霊にあげることで言う事を聞いてもらう、という感じだ。
つまりはヨシノのように大体で大規模精霊術を使えるけど、魔力を使うということだ。

『了解しましたわ！物凄いのをお見舞いしてあげますわ！』

シュリの胸から（少し腹が立つ）出てきたメルツはヨシノの額に手を当てる。

ヨシノは身体から何か、吸い上げられる感覚を感じ、そして酷い脱力感を覚える。

（前は少しだったから感じなかったけど、魔力全部は少し、言い過ぎたかな・・・）

『キタキタキタキターーーーきましたわー！みなぎってきましたわ！今なら大地を切り裂き空を割ることも出来るきすらします！』

「いやできないから。俺の魔力ごときじゃ。だろ？というか早くしてくれ。時間がない。」

『はい！やはり奴らを意識を根こそぎ奪うなら！雷の精霊！これしかない！』

若干テンションのおかしくなったメルツは空に向かって両手を上げる。

それはまるで天に祈る乙女。

小さいながらも、美しい横顔に思わず見とれてしまう。

そして。

『神☆雷☆招☆来！』

空が輝いた。

それは、もの凄い轟音と共に落ちてきた巨大な光の柱。

それは、そこにある全てを白い世界に導いた。

真っ白になりながら思い出す。精霊術は魔力は少なくて済むことを。

つまりはローリスクハイリターン。

真っ白になる視界の中、ヨシノは叫んだ。

「って！おぉぉぉい！やり過ぎだ！ボケぇ！」

第２３話　義賊。（前書き）

評価が２００ポイントを超えました。ありがとうございます。
遅筆ですががんばります。

第２３話　義賊。

空は、青かった。

どこまでも続く深い青に俺は吸い込まれてしましそうだ。
しかし。先ほどまで青々とした木々の緑はどこにいったのだろう？
不思議だなぁ・・・あはははは・・・

という現実逃避し始めたヨシノは辺りを見渡す。
先ほどまで戦いの喧騒は嘘のように静まり、代わりにあるのは死屍累々。
まるで巨大戦車が踏み荒らしたかのような、戦場。
義賊のログハウスを燃やしていた炎もかき消えている。
いや、ログハウスだったもの、か。
それはもう廃墟のようになり、すでに人の気配すらしない。
むしろ、炎で焼かれたほうがまだ。という状況だ。

ヨシノは能力を解除し、ドア氏に戻した相棒を足に立て掛ける。
横にはへたり込んだシュリが呆然としながら前を見ている。

そんな辺り一面更地のようにしたメルツは満足気にシュリの頭の上で眠っている。
最大限の力を使用したのだろう。
ヨシノもシュリも、この状況では当初の目的だった義賊を仲間にしようという考えも白紙になったと深いため息を着く。

「しっかし・・・この状況・・・やばくないか？」
「えぇ・・これだけのギルドの人を殺したとなると・・・４カ国中

に追われることになわね・・。」
「メイエール云々言ってる場合じゃないな・・・」
「しかも。義賊ごと殲滅したわけだし。この国にとっては好都合な指名手配犯ね。」

「はぁ・・・殲滅かぁ・・・ん？」
ピクンと身体を震わすヨシノ。
「どうしたの？気でもふれた？」
「いや・・・良いことを思いついたぞ・・・かなりの下法だが・・・」
ニヤリと笑うヨシノに思わず後ずさるシュリ。
「いいか？元々、ギルドは義賊殲滅しようとしていたんだろ？なら・・・俺達はギルド会員達と共に義賊殲滅に来たことにしよう。」

「ま、まさか・・・でも・・・」

「他のギルド会員達は死亡。義賊は殲滅。しかも・・・誰も目撃者は、いない。」
「た、確かに・・・でもギルド長も死んだのよ？誰に報告すればいいの？」
少しだけ乗り気なシュリが問う。

「んー。そうだ！そしてこのまま首都に言って、なんかうまいこと言ってさ。現王に会ってさ。そこをぶっ飛ばせば最高の展開じゃね？」
「うまいこと、っていうとこが一番問題なんだけど・・・で・・・でも、うまくいきそうな気がしてきたわ！」
「だろう？さぁマイハニー！しっかり掴まってないと振り落としち

ゃうゾ？」

しっかり現実逃避し始めた2人。どんどん黒い笑顔になる2人。
でもきっと2人なら乗り越えられる。
2人の明日はどっちだ？

「・・・・・・ハイテンションはとこ。すみませんが」
「「ひいぃぃ！！」」
突然、声を掛けられ、座り込んで現実逃避していた2人は飛び上がる。

そして後ろの陰から出てきた人物は。

「どぅも。藤堂です。いかがでした？楽しんでいただけました？驚きました？」

呆気にとれてる2人。藤堂が、その方向から出てこれるわけがないからだ。
藤堂が当初いた位置は2人の対極。しかも直撃の真下だ。無事避けられたとしても無傷ではすまないはず。
なのに藤堂はかすり傷、いや服すら汚れていないように見える。
人懐っこい笑顔で藤堂は話しだす。

「あそこにいたのは別人です。ほら、あなたの使っていた、変身するやつです。」

「な、なんでこんなことを？まるで他から奇襲があることを知っていたんですか？」
奇襲や他の思惑がなければ、わざわざそんなことをする必要がない。数十人の護衛を無碍にする必要が、ないのだ。
「・・・なるほど。なかなか頭の回転は速いようですね？では不思議に思いませんでした？私達がなぜ、ここにいるかを。」
「確かに明日のはず・・・でも。俺達には嘘をついて元々今日だった可能性も・・・いやメリットがない。まるで俺達が義賊の仲間と疑っていた可能性はあるが・・・」
ふふっと笑い藤堂は話しだす。
「試した、という可能性は考えないのですか？」
「試す？それこそ無い話だ。じゃあ俺達が義賊を助けにいくかどうかの試ししか、無い。裏切るか否かということ、しか・・・」
言葉と突然切るヨシノ。辿り着く可能性。
「まさか・・・信用できるかどうか。ということを試したのか？なんのかめに？俺が流人だから？いやこんな犠牲を払ってまでやることじゃない・・・」
「少し正解。ですね。ヒントはーそうですね、『私がギルド側じゃない可能性』というのはどうでしょう？」
「ギルド側じゃって・・・え？義賊側？え？」

「まぁもう正解言ってしまいましょう。私、義賊です。ちなみにここにいる人はみんな義賊です。」

手を広げここに居るを強調する藤堂。

「いやいやいや！そんなこと言ったって！殺しちゃったヨ！死んじまったヨ！どうすんだヨ！」

「いくら大事な流人の為でも殺しませんよ。大丈夫。生きてますみんな。サクラ！連絡！」

藤堂がそういうと、後ろに隠れていた、小さい女の子が飛び出す。
１０歳ほどだろうか。セミロングぐらいの黒髪。和風な顔立ちから育ちの良さを感じるが、やや鋭い眼には強い意思を感じる。

この子は絶対美人になるなと思うヨシノ。
その可愛らしい少女は藤堂に小さく「わかった」と呟くと目を閉じる。
すると少女のまわりには半透明のモニターやいくつもの意味不明なグラフなどが浮かぶ。

「コール：ウサちゃんへ。作戦終了。さっさと戻れ」

そう少女が呟くと、屍の中からすっと立ち上がる人影。オレンジに近い赤い髪の女性。ツンと出た耳をしている所をみると、エルフらしい。やはりスタイルは良いやはりエルフ自体美形が多いのかとヨシノは思った。しかし。
物凄い怒っている。全開で。そしてこちらにスタスタと歩いてくる。

「聞いてないぞ！こんなすごいやつなんて！私の家が無くなってしまったではないか！」

開口一番キレ口調のエルフ女性。ヨシノはビクビクしながらシュリの背中に隠れる。

「まぁまぁ。未知数といったじゃないですか。貴方が仕掛けて置いた高ランク用結界も役立ったんですから。あ、こちら私になってた人です。生贄さん・・・じゃなくジュジュさんです。」

「い、いま絶対生贄っていったぁ・・・藤堂・・・覚えとけよ・・・あの結界無かったら今頃・・・・しかも壊れるほどのだぞ？！２回は死んでるわ！」

そして少女に向き直り、さらにまくし立てる。

「そして！サクラちゃん！うさちゃんはやめて！あとこんな近いんだから耳元で「起きてジュジュおねえちゃん！」が必然！当然の報酬よ！」

「うるさい黙れ牛。」

プイっと横を向き、呟くサクラという少女。

ふーふー言いながら詰めよるジュジュと紹介された女性。

「ほっほう」

恐らくだが、シュリの１．５倍は胸が大きい。息するたび揺れる２つの山。しかも所々切れた服から見える肌色。思わず釘付けになるヨシノ。

「ほっほう」

ヨシノの視線の先にあるものを確認したシュリ。
ドゴッと音がなるほどヨシノの頭を強打する。ヒジで。

「ぐはっ！？」

突然のことで倒れ動かなくなるヨシノ。
その声で藤堂ら3人がヨシノ達を見る。
その時、ジュジュの一言が空気を一変させる。

「んん？あなた・・・・もしかして・・・・シュリ・ガーディアル・メイエール？」

ジュジュの言葉に自分が変身を解いていることに気付き、動揺する。

その空気を察した藤堂はこう提案した。

「ヨシノさんも倒れたので、回復しながら少しお互いを話しあいましょうか？」

第２４話　和解と土下座。

ヨシノが目覚めると、騒々しい空気だった。

倒れていたギルド会員達はジュジュの結界により、ボロボロになりながらも生きており、

シュリの回復魔法で意識を回復し、各々でさらに回復しあっている。

「目が覚めたようですね」

「ん、藤堂・・さんか。俺、少し寝てたんですか？記憶が・・・」

「敬語じゃなくていいですよ。もう仲間じゃないですか。３０分ほど気を失っていたんですよ？理由は・・・まぁシュリさんに聞いてください。」

「シュリ？」

しっかりと目覚めると頭の下にやわらかいものが・・・シュリのフトモモだった。

「ごめんなさい・・・そんなに強く叩いたつもりはなかったんだけど・・・」

「いや！大丈夫！ごめん！」

とっさに飛び起き謝罪する。

そして後悔する。

もう少し味わえばよかったと。

周りにはサクラ、ジュジュ、藤堂、そしてシュリがいる。

さきほど藤堂が「仲間じゃないですか」、という言葉を思い出す。

「シュリ。事情を聞いたのか？」

「えぇ。全てではないけれど、ね。藤堂はギルド長にして義賊の長。私達がどちら側か見極めたかったそうよ。そしてついでに、ヨシノの力が見たかったんだって。」

「本当に申し訳ありませんでした。いえね、ヨシノさん、能力の件で嘘、ついたでしょう？なので興味があったんです。でもこんなすごいとは、予想もしてませんでしたよ。」

「なぜ、嘘と思ったんですか？貴方はシュリの変身も見破った。能力ですか？」

「敬語は・・・まぁいいです。そうです。嘘を見抜けるんですよ。まぁ嘘発見器的な感じで。隠した内容までは読み取れません。シュリさんの正体はまぁ嘘ついているのはわかったんで、カン、に近いですけどね。」

「そして、シュリも全てを話した、ということだね？」

「えぇ。嘘がわかる人に嘘ついても仕方ないわ。私の正体もそこのジュジュにバラされたしね。」

「ちょっと！酷いじゃない！その言い方！永遠の親友に向かって！」

「まぁ昔からの悪友なの。ジュジュとは。彼女、学校では常にトップ3の成績ですごかったの。でも、性格がアレで、学校を途中で辞めて行方不明になったのよ。」

「違うわよ。ちょっと調べたいことがあって、集中して調べてたら、退学になったのよ。」

どんだけ集中してたのかツッコミたいところだが、話を戻す。

「そして藤堂達はシュリの話を聞いて協力する、ということですか？」

「ええ。もとよりこの国をどうにかしたい、ということで結成したんですから。そこに大義名分ができたんです。願ったり叶ったりですよ。しかし。仲間を探していた、ということは何かしらの作戦がおありなんですか？」

ちらりと横にいるシュリに目を向けるヨシノ。それを受け、ゆっくり頷くシュリ。

「・・・わかった。信じよう。シュリが信じているんだしな。先に言うが、これは俺の中で考えていたことで、沢山の穴があると思う。なにしろこの世界に来て1ヶ月経ってない。そこは考慮して聞いてほしい。あと敬語も止める。」

そこにいる全員が頷く。

「まず、俺達には協力者がいる。国内部の人間で一応正規軍だ、と思う。」

「なぜ一応？」

早速反応する藤堂。

「ハーフエルフの部隊なんだよ。あの人達の境遇を考えると正規軍になっているかわからないんだ。」

「ああ、なるほど。それなら大丈夫です。正規軍です。酷い仕打ちを受けているとは聞いたことがあります。」

「そうか。やはり。・・・まぁそこはいい。その部隊のジョセフという部隊長に聞いたんだが、１ヶ月後夾国の王がこの国に来るようだ。」

「なるほど。しかし、それをどうするんです？」

「俺の見立てだと現王は恐らく夾国の、操り人形に過ぎない。真に倒すべきは夾国。その王が来るんだ。倒せば変わるはずだ。」

話を聞き、考えふける面々。

その沈黙を破るのもやはり藤堂だった。

「まず、夾国がバックにいる、と考えたヨシノさんは素晴らしい慧眼だと思います。しかもその来訪の情報は非常に素晴らしい。私達も来るのは知っていましたが、正確には掴めないでいました。しかし。」

言葉を切り、また話し始める。

「しかしですね。それは早計です。あくまで今この国と夾国は上辺ですが、友好な関係にあります。無理に殺害すれば攻め入る口実を

作るだけです。向こうは完全従属させたいはずですからね。」

「でも、なにかしらの影響を！」

「それでこの国や他の国が奮起してくれるとでも？ありえない。まして精鋭を連れてくるはず。簡単にはいきません。」

確かにそうかもしれない。と、自分の浅慮を憂うヨシノ。

「しかしですね。面白いことがわかりました。」

「面白いこと？」

「ええ。まず、なぜ夾国の王自ら、来訪するのか。そしてなぜ、シュリさんを突然捕まえることにしたのか。そこを調べる価値がありますね。」

「・・・そうだな。確かにおかしい。最初、シュリを献上するつもりかとも考えたが。わざわざ自分から来訪する必要はないな。しかも献上するならもっと早くするはずだしな。」

献上、という自分をモノ扱いする言動に少しむっとするシュリだが、確かに、おかしいと思う。でもそれ以上に不思議に感じることがあった。

「ねぇ・・さっきから聞いてたけど、別に偽王討伐とか言い出して発起すればいいんじゃない？私がいれば大義名分があるんでしょう？」

「向こうとこちらの兵力に差があり過ぎます。こちらは確かに質は

高いですが、数は脅威です。なにより・・・血が流れすぎます。疲弊したところを攻められ、国自体が無くなるかもしれませんよ？」
「でも！ヨシノの能力があれば！」
「その能力は制約はないんですか？あれほどの能力、何度も使えるとは思えません。」
「そういえば話して無かったな。嘘がいえないんじゃあ正直に話す。1日31分、そして人を殺せない、だ。」
それを聞いて驚く藤堂達。そして気まずそうに口を開く。
「いや、すみません。フェアじゃなかったですね。信用してくれと言っておきながら。私の能力の制約は『飲物を飲んでいる時だけ』です。なので今は発動してないんです。そしてなぜ制約が2つもあるんですか？初めて聞きました。」
「そうだったのか。まぁ聞かなかった俺も悪いし。信じたからにはどこまでも信じる。」
「ありがとうございます。では。その能力ならなおさらです。奇襲向きです。正面からの終わらない攻撃に、数を減らさず対応できますか？31分後は？」
「確かにな。しかも俺自身どこまで使えるかわかってないし。なによりシュリを危険にさらすのは嫌だ。」
「それでは。とりあえず少々時間がかかるかもしれませんが、間諜を送りましょう。それまではヨシノさんの能力を解明することなどをやりましょう。・・・・とその前に。」

「その前に？」

「みなさんがそろそろ回復して怒り心頭中です。全力で謝ってください。」

見ると、立ち上がり始めたギルド、いや義賊達はヨシノを睨んでいる。

「い、いやこういうのは長たる藤堂が場を収めるのでは？」

「長といっても、偉いわけじゃないんです。同志なんです。止められそうにないですね・・・」

そしてヨシノの土下座地獄が開催されるのだった。

ちなみにシュリは回復したこともあってか感謝され、メルツは不問。世知辛い世の中だと痛感したヨシノだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4350v/

31

2011年11月27日12時08分発行